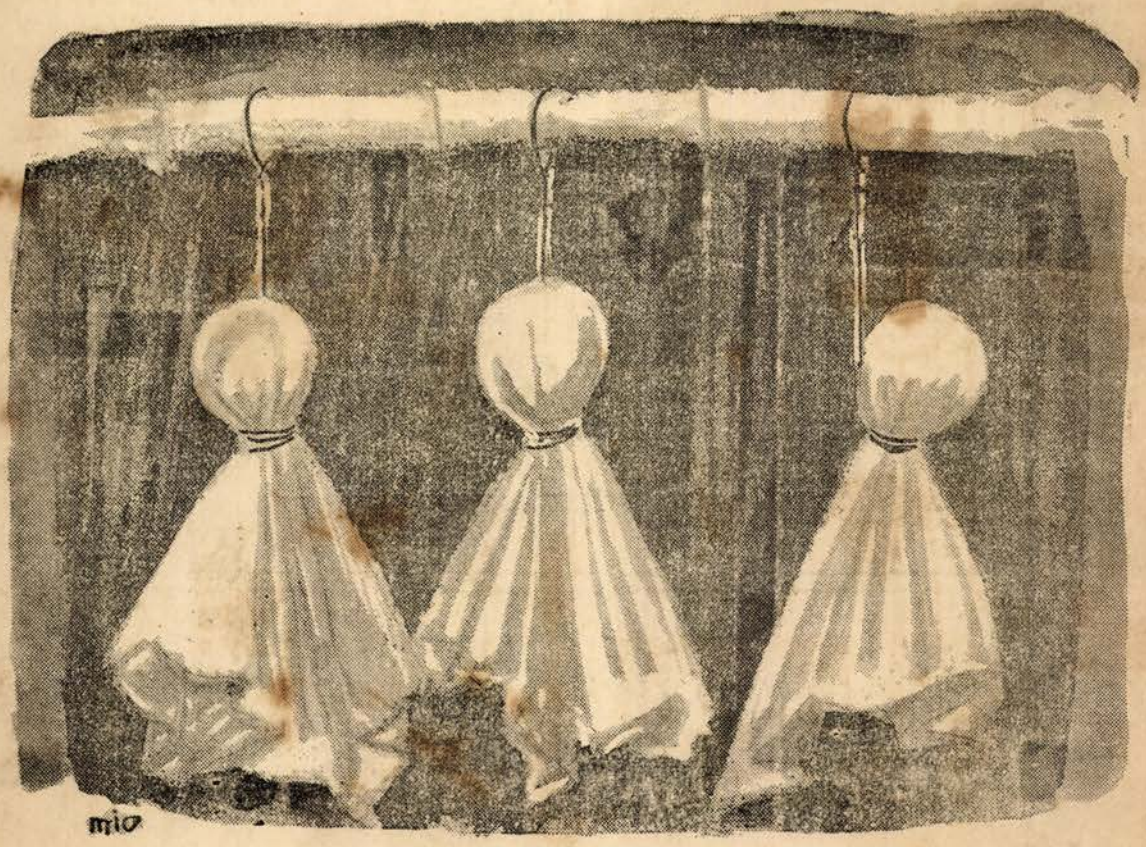
川柳雜誌

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿六年六月一日發行第十卷第六號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年通卷・三百卅七号

麻生路郎★主宰



Pensoj fiu as trans la land-limon

The Senryu Zasshi No.337

六月號

六月號目次

（昭和三十年）

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
窓口談義……麻生路郎…（三）
選挙実話……長野文庫…（一八）
藤村梨花さんを訪ねて……丸尾潮花…（二三）
新川柳鑑賞……麻生路郎…（一〇）
花を愛する政治……藤本満年…（二二）
女性柳人の地盤……品川陣居…（一二）
趣味の川柳浴衣……路郎生…（元）
にぎりめし……福田山雨楼…（一七）
僕と昆虫……東野大八…（九）
皐月の風……若本多久志…（二五）
江戸川柳に現われた女形役者の紋……阿達義雄…（二六）
仮説浦島太郎……山根白星…（一四）
川柳まつりに就て……（二三）
ユーモア横丁……不二田三夫…（二〇）
★
不朽洞句帖……麻生路郎…（三）
川柳塔……麻生路郎選…（四）
同舟近詠……諸家…（二二）
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…（一四）
一路集 「エチケット」…菊沢小松園…（二四）
「先輩」……小西無鬼…（二四）
各地柳壇……（三〇）
川柳第二教室……戸田古方…（二八）
「質疑に答える」欄の新設……（二七）
不朽洞会から……（二二）
柳界展望……（三五）
編輯室にて……（三五）

本社六月句会

お互いに句会は休まないことにいたしましょう。

日時 六月十一日午後六時半

会場 光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前

兼題「レインコート」路郎選 二句
「鉢植」 栞選 三句
「合併」 恒明選 三句
「脱線」 潮花選 三句

柳話 麻生路郎

句評 戸田古方

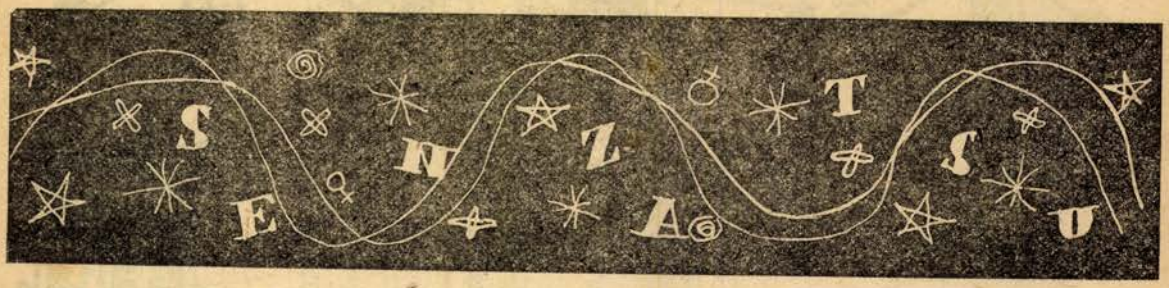
会費 五〇円

川柳雑誌社句会部

BK川柳を募る

課題「シャツ」 路郎選
ハガキに三句、締切六月末日
大阪市東区馬場町
大阪中央放送局
BK川柳の会宛

入門も奥義も『川柳雑誌』から



窓口談義

スランプを救うには どうしたらいいか

近ごろはいそがしいので作れないとか、スランプで弱っているとか、作れても凡作ばかりで駄メだとか、よく聞かされるが、同じ作れないにしても人によって多少事情が違うと思う。

どんなにいそがしくても作れる人がいる。イヤ、ひまな時よりもいそがしい時の方がよく作れると云う人もいる。スランプで弱っていると云う人に事情を聞いて見ると、作りたい気持は十分にあるのだが、いくら絞り出すようにしても一句も浮んで来ないのだと云う。次はいくらでも作れるが、作った句をあとで見ると、どれもこれも凡作なので、進んで投句する気にもならないが、締切が来たので、ムリに投句して見ても、自分でも凡作だと思うような句なのでも、あとで見ると凡作ばかりであると云うことも有り得る。又幾ら絞り出すように、苦しんでも一句も出て来ないで神経だけが疲れると云うこともあり得る。そんな時、そんな人たちはどうしたら、又元の作家に戻れるであろうか。これはスランプ作家にとって大きな問題である。

○

商人が商業を営んでいるのを見ると、小さい店は小さい店なりに、何かを売っている。しかし売れれば商品は必ず無くなるのであるが、毎日何かを売っていても、商品は決して無くならないで、店は小さくてもいつも商品がならんでいる。これはどうした訳であろうか。

商人は商品が売れるに従って、一方では絶えず商品の補缺をして行くから、幾ら小さな店でも、商品が無くなってしまうと云うことはないのである。しかも儲けようと思えば仕入れが肝心だと云われている。

○

前述の句の作れない作家たちは商人がすべての商品を売りつくして仕入れを怠ったとしたら、売ろうにも何一つないのと同じ立場に立っているのではなかろうか。

作家は果して、毎日仕入れをドシ〳〵続けているか、どうかについて静かに考えて欲しい。仕入れを怠っていて、行き詰った、底をついたとなげいてもはじまらないではないか。商人に仕入れが肝心のように、作家にとっても仕入れが肝心であることは云うまでもないのである。

○

ではそれ等の作家はどう仕入れしたらいいかと云えば、川柳以外のものを広く、読むこと、観ること、聴くことである。そうすることによって、作家は新らしい思想の世界へ更に一歩踏み出すことになる。それ等の思想がやがて、作家の将来の作品の中に流れずにはいないであろう。

（路郎）

不朽洞句帖

麻生路郎

河盛安之介氏の旗市長に當選を祝して

人にあり　ここに芽出度き市長の座
愛に果てなしみおつくしの鐘となり
夫のものを仕立直して着るも年
ままあがれあがれは名誉初段なり
晩年をまだ隨筆に生きんとす
急逝を妓がいつち早く知り

川柳塔

豐中市　戸田古方

あわれ陣笠二兎も三兎も追いつづけ
几帳面に薬のんでるのが淋し
ジャーナリズム明日の責任までもたず

大阪市　市場没食子

受験の子あって一層春寒し
古本をあさり逢曳時間まち

横浜市　福田山雨楼

春寂しチャッカリ夫人白髪抜く
エロ座談うまい市長でまた出され
動物園みな就職をしてるなり

結婚四十年近し

塀直す妻のある日は大工さん
息苦し秋風まではもつかしら

ホノルル市　内藤草一郎

レデーファースト外套ぬがせ椅子を引き
鼻毛抜く顔は恋にははるかなり
敬老会お国なまりで謝辞がすみ
眼中にないとは振られてからのこと
憧れて来たアメリカも寝て食えず

大阪市　須崎豆秋

着るものがあるかと春にささやかれ
街へ扉を開けまいらする仏壇屋
機関車も一人で走って見たかろう
駅長が眠気ざましに水を撒き

東京都　藤本満年

当選の写真はボスの面構え
アパートの明日は違った人が住み
濁流の世へ新卒は投げ出され
颯爽と女あんまのワンピース
再婚のもうその日から板につき
散歩して名士の門を見上げたり

大阪市　正本水客

蒸しタオル連れの女を無視したり
前の晩から来いと夫婦の名を並べ
全快の縁は新芽に手がとゞき
知らない名前が多い人間文化財
退職金の計算笑ろてしてるなり
せめてもの反抗坐りかえ坐りかえ

池田市　黒川紫香

ざあますとざあます住宅地への道
お茶のんでいるのが代筆させている
電柱へ今日は違った女待ち
沢庵の味だけ故郷のものになり
片っぽの下駄で蟹とり戻って来
先客の声は去にそな声ばかり

手島一舟君黄綬褒章授賞さる

黄綬章までは内助もミシン踏む
テキサスが好きな女の子にこまり

大阪市　北川春巣

転宅

お隣は交番ただしいつも留守

京都医学会総会

医学会出席カメラぶらさげて
外人も女の方がよく喋り
お宅へ訪えば三味線も弾く恩師

H君のインターンシップを祝う

あんたもう医者臭いよと言われて居

結婚満十五年

水晶婚（クリスタルウエツディング）　家風そろ〳〵出来かかり
十五年簞笥の疵も十五年

奈良県　尾崎方正

天寿全うし焼香に悔もなし
子を連れてつんとしている阿呆らしさ

岡山県　逸見灯竿

哲多町生る

合併に山紫水明考えず
合併へ山川草木蘇り
合併の話がバスを乗りすごし
歴史ある村今や消えんとす
合併の村へ変らぬ水流れ

大阪市　武部香林

長生きがしたし書斎はまだ出来ず
義手義足花見の客の振り向かず
葬式屋儲かりまっかと言われたり

午後からは出易いとゆう廻り椅子

関西総合美術展

無所属の絵が隅にある美術展　大阪市　水谷竹荘

事勿れ主義では出世出来もせず

妻ほめる頃には白髪ふえている

妻と二人写して見てもはじまらず

色の道くわしいわねともてゝいる　下関市　弘津柳慶

社内野球社長意外にギッチョなり

子を連れた花見酔っぱらいさけて行き　尼崎市　小林文月

スピーカーの故障に候補一息し

ターミナルで二時間待った四月馬鹿　福岡県　山根白星

裏街に住み内閣が気にいらず

左前オメガのネジもゆるみがち

ヴァイオリン手真似で貸して呉れと言う

遊びましようとこれも働く女なり　大阪市　渡辺孫拙

すいた惚れたも生活不安がつきまとい

囁きも女がさきにすゝりなき　大阪市　冨岡淡舟

眠れないのは恋かしら春の夜の

洋館に住んで居るのに和服好き

人選を相談されて気がつまり

あやまりの役を上司に指命され　奈良県　飯降白香

旅づかれの瞳にみかん畑が美しく

えらい人ほどてんやわんやの私生活　奈良県　西辻竹青

父未だ明治の頑固捨てきれず

終電のそれまで夕餉待つも妻　山口市　長野井蛙

退職を目出度いなどと気も知らず

イャリング夜汽車に見栄もなく眠り

献盃の膝を正して順を待ち

あざけつたその職安の窓に立ち　布施市　森下愛論

ボマードの香りも何か春めいて

皆な寝かしても女には用があり

掃除婦も官庁と云う掃きっぷり　岡山県　直原七面山

お茶くみをしてゝもミーは女子大出

胸病めば科もつ如く人をさけ

三つ指で迎えられたが気にさわり　大阪市　西森花村

逃げもってパパ暴力はイケマシェン

五重塔頭打つ様に梯子つけ

その割に葬儀屋自宅から出さず　鳥取市　河村日満

蠅が出てきたも気にして病んでいる

風邪でさえこの頃寝込む我れとなり

噂ほど飲まず乱れた足で去に　落第へ貧しいからと子もひがみ　兵庫県　田代尋四

口紅のあせたのばかり終電車

墨染で包んだ体もてあまし

惚れた眼で見ても貴男は五十六　大阪市　谷内一草

遠くまで見え冬の街うら淋し　大阪市　福本翩骨

手袋の脱ぎすてられしぶきみさよ

小使の猫背臍くりためて居り　大阪市　榎南夏六

冬の街列車が着いたのに気付き

風邪気味へ嫌な皮肉を聞かされる　鳥取市　青木遊星

俗人と一線を引く一等車　岡山県　横部牛歩

姑に嫁の美貌が気に喰わぬ

弔辞いま竹馬の友へ嘘も混ぜ　岡山市　服部十九平

老僧が高野豆腐の味を説き

雪原の純潔すぎて親しめず

感覚のズレを美展に来て覚り　尼崎市　長谷川三司

花吹雪花見小路は昼の雨

布団干す特飲街は昼の月　大阪市　若林草右

合オーバ午後から雪の衿を立て

五人囃子ひとりで流すチンドン屋
カツギ屋は大黒様の様に坐し
磨かせてガム噛んでいる紅い唇
大阪市　足立春雄

考えの深さが卑怯者にされ
裾引いて嘘もきれいに青畳
熊本県　有働芳仙

満員車だからはっきり手を握り
灰皿の中に勿体ないピース
校長は旧教育の良さを言い
高知市　大西迷窓

畳替したのに派手な汽車ポッポ
ふるさとの島が恋しい夜の女
急用があるのに砂丘にころんでみ
下関市　阪田良坊

不足なく育ち不良の友が出来
ぶらんこを振れば太陽共に揺れ
松村晴君を悼む
ゴール無きゴールへ君は何ぜ急ぐ
下関市　石川侃流洞

汁の実を刻むリズムは妻のもの
三田周平氏の葬儀
かなしみがじかにこたえる燈明がゆらぎ
左手でよかったねーと怪我見舞
広島県　山田季賛

共稼ぎ妻がよっぽど強い酒
子沢山家出する子も居てこまり
言訳は幾らでもあり邪魔くさし
癒ったら行きたい地図を読む日永
大阪市　山本葉光

花ぐもり喧嘩を三つ見て帰り
倉敷市　木村千容

花の下釈迦宣言をふと思い
ヤットコショ云えば女中が笑いこけ
代理とは知らず視辞を頼みに来
倉敷市　田垣方大

ふるさとは寝ている頃か戎橋
大阪

旅楽し前も隣も女性です
芝生までその多情さに呆れたり
石川県　那谷光郎

死ぬ前の日まで算盤はじいてた
物知りが居て相談をこじれさせ
二号置く養子商才ありあまり
石川県　野村味平

同伴でないから今日はたかられる
アベックへガイドいささかてれくさし
大阪市　木村水堂

文化的生活しに遠く子沢山
肩書がない倖せのコップ酒
あきまへんなどと芦屋へ居を構え
毒舌が古稀を迎えて衰えず
正論が煙たがられる世とはなり
堺市　八木摩天郎

葬式と見たら候補者珠数を出し
嫁の母女中を置けと言うて去に
雲仙にて
商魂は真知子の漬けた春樹漬
義憤だけ感じて金は出し渋り
同権にしては小さい花名刺
倉敷市　水谷谷水

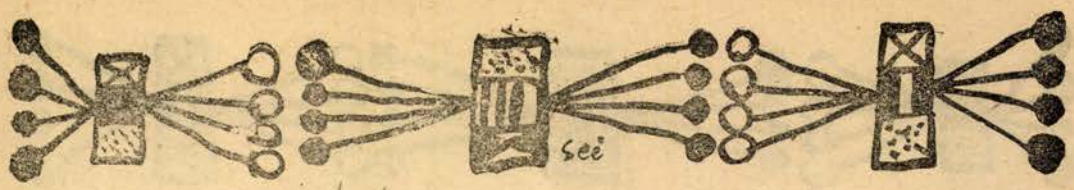
笑い方までが変った袖の下
家出の娘雨具も持った慎重さ
スキーでもするさと左遷うそぶいた
抵当の屋敷の内で散る桜
先立たれてからは背負うて飲みに来る
工事場へ来て技師らしく空を見た
倉敷市　相原一善

電話口切口上へ女じれ
奥様にお逢いしますとおどかされ
只なすがまゝライバルの見事さに
引込が付かずポリスへくだを巻き
岡山県　田村藤波

思い出の人の便りも絶えて老け
ランドセル兄のお古がちとむくれ
岡山県　岡田夜潮

寝たかさが小そう見える長病
貴方って女に思いやりが過ぎ
工面して戻れて女房眠って居
岡山県　本田恵二朗

村の無形文化財と自任して



大阪市　真鍋一瓢

ぺん〳〵草かて春じゃもの春じゃもの
鰯悲しや胎児諸共食われたり
楽天家のクラゲは磯に置去られ
しなびても土筆袴はつけていた
民情視察瓦斯の細さは知りやすまい
縁あって来たビヤ樽に似た女中
媚目秀麗二号向きにぞ生れける
因縁は悪しガサツに盛る鰯
水族館食気放れて見て通り

京都市　松川杜的

肩書がつく〳〵欲しい四十過ぎ
休んだろと思えば明日は給料日

大阪市　永田六龍子

幸福が満ちあふれてる市場籠

豊中市　村上ゆずる

のほゝんとしてるが勘定高い彼
医学会籤医者同志のむ話
寄れ寄れと寄れば寂しい四畳半
お土産を貰い子供はもうなつき
春休み隣も主人留守居なり

鳥取市　森本法泉子

わが子進級

二年生一年生をのぞきに来
校長も出てきて遊ぶ春の庭
お城まつりの松江にて
イャリング語れば出雲訛りにて

米子市　日置文郷

休温計雲と雲とが窓に逢う
集漁灯平和な魚の眼に出逢い

大阪市　佐野白水

中学三年神武天皇とは何や
お向いの寺から春がやって来た

吉野にて

桜如きにこうも多勢人が来て

大阪市　尾野おさむ

へそくりの言訳妻は聞いていず
髪を切る切らぬの嫉妬もて余し
猫抱いた児もまじってる紙芝居

大阪市　岩島雄歩

青空の青さ猫まで背のびする

大阪府　小池しげお

イャリングきり〳〵廻し拗ねられる
ドスの傷だなアとパン〳〵思うとき
めがねはずしたおもろい顔へ化粧する
生字引髯をそったり残したり
あゝしんどかったと母のピクニック
義理立てに喪服も珠数も借りてくる
ふところ手五万円程拾いたし
二日酔どんな桜であったやら

倉敷市　松村萬古

仰げばになって校長の手が震え
春の詩を書けと土筆が顔を出し
品変えて又も来ました叩き売り
美人などとんでもないと嬉しがり

倉敷市　藤井春日

六人ももうけた仲の打解けず
南地から出てましてんと姥ざくら
かつぎ屋の風呂敷だけに資本をかけ
附合いの針へは雑魚も食いつかず

大阪市　木口賀峰

新聞とマッチは役に立つ子供
子供まで恐がる程に酔うて来る

選挙

泣くように言うてた顔がのし上り

岡山市　津田麦太楼

ズロースの盗難もあり春なれば
五六票繰めたらしい立話
禿げるのは痛くないのが取柄なり
おわい屋の背にも桜が散りかかり
ベストセラーズチョッピリエロを効かしとり
泣虫で芯の強さを持つ女
梃でも動かぬこんな女に俺がした

米子市　小西雄々

一人ずつ子供も分けて離縁する
本当の都合知ってる女祕書
二号暇テリヤに芸を習わせる

岡山県　浜野奇童

御嬢さんに口説かれ公金使い込み
裏町ですゝけた友の名を見付け
人生の裏を小使さんに聞き

卒業の子へ

心配は早や中学の友の事

選　挙

手を振ってやれば候補者目を細め　吹田市　橋本幸男

女レスさすがは派手な悲鳴あげ

待ち合す時計のネジは又巻かれ　堺市　高崎雄声

縁談が纏まるとこで胸を病み

見渡せば皆恐妻の顔に見え

儲けてからはものをも言わぬ仲　大阪市　森文夫

税務吏がにッと笑った洗濯機

なんでも買える時代を妻は淋しがり　大阪市　吾郷玲人

もう死んでほしい人とは淋しいネ

歌舞伎から寄り添うて出る老夫婦

服装があり代表に選ばれる

先妻の位牌に冷たき手が触れる　岡山県　永松東岸子

弱点を握り敬語が少し取れ

助かった様に電話に座を外し

掛軸の裾にも春の風ありぬ

その恋も桜の花の散る如く　倉敷市　野田素身郎

失恋へいつもの喫茶店はさけ

退庁のサイレンベルトを締めなおし

ひまなのにカッターシャツはよう汚れ

噂も聞けぬとこへあの人転勤し　倉敷市　安原斜木

気安めに言うた昇給真に受けて

死ぬ程の恋を美人は寄せつけず　大阪市　西川恵風

遺言で派手な葬式してしまい

成功の便りに恩師眼鏡ふく　吹田市　菊田いさむ

子が出来ずよその子供に見送られ

呑む話だけはずんでる社長室

素うどんへくったくのない子が並び　神戸市　岩田一夜

病妻へすまない遊びして帰り

パトロール遅い二階の灯を見上げ　大阪市　神谷凡九郎

こゝいらで鶯嬢は歌になり

生きてゆく力煙突太々し

なる様になるさと余裕あり気なり　大阪市　山川阿茶

拾い屋の犬も子供を生んだらし

看病はこうありたいとながめて来　大阪市　清水望峰

月給日なんと心のかるい日よ

私鉄スト動物園へ足が向き　大阪市　川端鬼酔

鼻声にものを言わせた二カラット

齢一つ二つの嘘も女なり

変えたい気へメーターは又上り

未だ脈が有る証拠には女房妬き　大阪市　木村十悟

莚二十円で借りてくる青空

手形落すどさくさの間に花も散り　大阪市　伊達堰子

法事頼む寺も息子の代になり　大阪市　不二田一三夫

隆鼻術父母の面影消す如く

商魂と見られて挨拶情けなし

歌うほど英語上手に喋べれない

――作家に――

作家として立つ以上、作句に対する熱は燃やし続けて欲しい。アカ〳〵と燃やし続けている作家の句に接することは小気味のいいものである。

締切が来たからコレでも出しておこうかと云うような句では選をするのに張り合いがない。誰も彼もそうだとは云わないが、思いあたる人は反省して欲しい。少々キズがあってもいいからイキのいいところを見せてもらいたい。

自己の作品に対してはモット〳〵なやむ必要がある。なやみのないところに向上はない筈である。

横綱でもヤヤヤではファンを失望させるものである。作家もファンのあることを忘れないで毎月出句されたい。（路）

人間横丁 ㉖

僕と昆蟲

東野大八

「砂漠は生きている」という映画を見た。この映画は、八つのアカデミー賞を受けたとかで、前評判も相当なものであったが、成程大した作品であった。デミル監督のスペクタクル大作といえども、この映画の面白さには及ばない、という米紙評が全くカケ値のない言葉であることを知った。

舞台は、有名なアメリカ西部の砂漠である。見渡すかぎり何の変てつもない砂また砂、炎暑と熱射の不毛のこの天地に、どうして生物が生きていけるのか、その自然の奇蹟に私たちは、たゞわけもなく眼をみはる思いであった。

映画は、この砂漠を舞台とした生物たちの、生と死の斗争であるが、その生死の境に登場する動物、鳥類、昆虫たちの何ということ、愛と友情と、ユーモラスな禽獣たちの生活がそこに展開する。その舞台はけんらんたるテクニカラーに彩られた雲と土と花と風である。

戦後成金のような山ねこ、ギャングの親分のようなガラ〳〵蛇、チンピラみたいなポケットネズミ、巾着切もどきのこうもり、評論家風のフクロウ、おせっかい者のミチバシリ、成上りの貴婦人みたいなスカンク、戦斗機のようなヂカバチ、この戦斗機に食下る日本人みたいな砂アリ、ぬいぐるみの山賊みたいな土ぐも等々、これらがこの映画の主役として次々にと登場する。演技なきそのスターたちのリアルな生態は、見ているうちに万事、ひどく人間に似通っているということに私は気付いて、幾度か笑い出したり、吹き出したりした。

私はむかしから、動物殊に昆虫が好きであった。「僕の昆虫記」と題して一昔も前に川柳を作った。左様三、四百句にもおよんだろうか、当時他の川柳は忘れて、ひたすらこれだけに愉しく凝ったものである。

—百足いま後の足とすれちがい
—オホ、、と笑って蝶々花を去り
—カフエーの気分で蜂は花を出る
—春風にまた飛んでみるてんと虫
—蟻と蟻たしかめ合ってすれちがい
—水すまし思案は少し流れて見
—くつわ虫調子が出ましたルムバです
—溜息で今度は螢光るなり

などで、その頂点に達したのは軍隊での、戦傷による療養生活の床の上であった。

本も読めず、ラジオもきけず歩きもまゝならなかったこのとき、寝たっきりの私の前に登場したのは、蠅と蚊と蚤であった。

—もみ手する蠅「息災でおります る」
—息災でおります蠅は足もすり
—チンピラの蚊ですラグビーシャツを着て
—蚤の子はとんぼ返りから稽古

鄭州の野戦病院では、私の隣りの兵隊が息を引きとったとき明け放した窓からだろう、一匹の青い鈴虫が迷いこんでいて、その亡くなった兵隊の頬に止っていた。私は白く粉を吹いたような死者の皮膚の上で、長いアメ色の糸のような触角を動かしている鈴虫を、じっと飽くことなく眺め入っていたが、私はその兵隊の魂が、この一匹の鈴虫にとって変って蘇いているように思われてならなかった。素ぼくなこのその時の気持は、案外まっとうな思念の因果律だったかも知れないと今でも考えている。だが、これは決して明るいものではない。孤独な冷い哀しみに満ちたものだ。

—鈴虫の生命青さへすき透り

このときはこんな句しか生れなかったが—。

むかし、観た映画にレマルクの「西部戦線異常なし」というのがあった。第一次世界大戦の苛烈な戦場を撮したものであったが、そのラストシーンは今でもはっきりと私の記憶に残っている。この映画の主人公が、銃弾一つ聴えぬ爽やかなその朝、塹壕の監視に当っていると、その鼻先へ一羽の蝶がきてとまる、昆虫の好きな彼は、そのもんしろ蝶に心うばわれ、それを捕えようと静かに手をさしのべる。画面に大きく彼の手と、止った蝶の姿が写る。すると、不意にチュンという尖鋭的な銃声がスクリーンに木魂した。瞬間、画面の中の手はビクリと大きな反応を示す。蝶の姿は既に画面にはないが彼の手はすでにコト切れていた。「西部戦線はこの日、異常なしと伝えていた」という解説が、その後に出てこの映画は終るのである。

「人間魚雷回天」という映画では、人間魚雷でいざ出撃しようとする特攻の一人へ、若い水兵が黙って鼠の子数匹をさし出す場面がある。大方の観客はこの意味がのみこめないようであったが、私はその瞬間ほど、人間というものは胸を噛まれる孤独感に襲われることはない。誰かと生きていたい何かとでもよい、その魂の道づれが欲しいのである。敢ない本能といえばそれまでだが…私はノモンハンでも、敵の銃砲火の真只中にさらされた兵隊が、夢中で傍らにいるバッタを、気がちがったように次から次へポケットに押しこんでいたという兵隊の告白をきいた。まだある、比島の死刑囚が、独房に現れる鼠を、恋人の様に胸ときめかして待った、という話など。

人間は、最後には必ず死なゝければならぬ、然し人間は常にそれは遠い先の先の話だと、自分勝手に思いこんでいる。それだから夢でも抱いて人間は生きてゆけるのであろう、今日限りの生命と既に神が定めたその人間にしても…である。

とにかく私が動物に心ひかれ昆虫を愛するのは、短いうたかたのその生命を意識の外において、生々潑剌と彼等は愉しみながら、その生活と斗っているということだ。

「砂漠は生きている」白状すると私は、この名画のスクリーンを眺めながら、笑い興じつゝもしきりに涙が溢れ出てならなかったのである。

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一四三〕
新築へもう天皇の額かけず　（文郷）

その昔はよく天皇の額が座敷にかかっていた。それも新聞社などが配ってくれた印刷ものである。それをうや〳〵しく黒の額ブチなどに入れて掲げてあった。殊に田舎の古い家などには型の如く、そうした額がかかっていた。それが敗戦後、自由思想がボーバイとしておこって、天皇も亦人間天皇になられた。国民の中には民主主義のはき違いもあったが、天皇に対する感情にも大きな変化が来たことは云うまでもなかった。

家の制度も新憲法によって廃止された。家にコビリついたものはすべて捨ててかえりみられなくなった。天皇の額もその一つだと云えば云えよう。この句はそうした思想の変遷を新築によって、物語っているところに異色のある句である。

〔一四四〕
不縹緻の方へ初めは親しくし　（方大）

そこに二人の女がいる。それは女事務員であってもいいし、工員であってもいい。更に云えばその他の女であってもいいが、この作者は二人の女に接した男の心理を実に巧みにつかんでいる。誰でも美しくない女より、美しい女に心がひかれるものであるが、露骨に美しい女に親しく口をきくことは、何んとなく面はゆいものである。それに反して、不縹緻の女に対してはザックバランに口がきけるので初めはその方に親しくしたと云うのであるが、句の裏にはいつのほどにか美しい女と親しくなったことがうかがえ、それが恋にまで発展しないとしても男ごころの動き方をうまく描出していると思う。

〔一四五〕
街録の妻の鼻息まで聞え　（ひか平）

街録がとりあげた問題が何んであるかは判らないが、何れは封建的な家の問題か、生活に直接響く物価の問題かであろう。

スキッチをひねると自分の妻が、イキをはずませて喋べっているのが、手に取るように聞える。それを「妻の鼻息まで聞え」と表現したのはあざやかである。妻は平素のふまんをこの時とばかり、ブチまけているし、夫はアイツらしいことを喋ってやァがると思っている。その二つの顔がハッキリと浮かびあがって来て、ユーモア百パーセントの句である。

〔一四六〕
席譲ってやったに講談本を讀み　（香林）

サモ疲れた姿で老人が吊革にブラ下っている。なんだか気の毒になる。疲れていることは自分も同んなじだが、それだけに同情の念が湧く。

「マア、おかけなさい」

と云って席を譲ると、老人は無表情のまま腰をおろした。礼を云う言葉も出ないほど疲れてるんだなァと思っていると老人は懐ろから一冊の講談本を出して読みはじめた。この老人は仕事とはもう縁のない人であることが判ると、安価な同情から席を譲ったことが何んだか馬鹿々々しくなり、仕事でクタ〳〵になっている自分がいとしくなったと云うのであろう。皮肉な穿ちの句である。

〔一四七〕
ざあますに市場の口でとらえられ　（千代美）

軽い穿ちの句だが面白い。一寸したスケッチの句である。とらえられた女が市場籠をさげて、イラ〳〵しているさまが髣髴として眼にうかんで来る。

ざあます夫人の方は、時間的に余裕があるので、婦人会のこと、役員選挙のこと、お茶の集りのこと、うちの犬がどうとかしたこと、牛乳の値下げ運動のその後のこと等々と話題は尽きない。迷惑そうにしている相手のことなどは眼中にないのである。女性の世界の句である。

〔一四八〕
使い込みさせた女はけろりとし　（緑風子）

刑事の質問に対して、

「最初、ハンドバッグをあげると云われたから、そうと云ってもらいました。」

「それから……」

「それから、スーツを呉れたわ、それから、いろんなものを……」

「いろんなものとは」

「一々覚えてないわ。呉れたから、もらっただけですもの」

「二人はいつもどこで会っていた？」

「どこでッて、大てい喫茶店ですの、温泉マークですッて、冗談でしょう。わたし別段愛してなんかいないんですもの」

刑事はア然としている。そしてこの女のために使い込みをした男へあわれみの眼をなげているという情景を巧みに描いている。

〔一四九〕
一圓のお釣へ女わるびれず　（水客）

虚栄心の強いのも女の一面だが、一円のお釣りでも呉れるまで平然と立って待っているのも女ごころの一面である。そしてこの句は後者を詠んだものである。一円とは最小限を表わしたもので必ずしも一円に限った訳ではない。

〔一五〇〕
若後家の喪服一番よく似合い　（紫香）

女の喪服が、いつも見馴れている姿よりも一段と美しく見えることはおそらく誰の眼にもそうであるらしい。殊に若後家の喪服が、一番よく似合うように思えるのは、悲劇のヒロインに対する同情も加

味されるからであろう。この句は「一番よく似合い」と断定しているが、この断定は句意を強化するのに役立っているように思う。

〔一五一〕

よし来たと博士が踊る奴さん　（豆秋）

集会が済んで宴席にうつった。宴たけなわになつて、かくし芸の指名がはじまる。博士さんに白羽の矢が立つ。

「よし来た」

とばかりに博士さんが気軽に立って、奴さんを踊ったと云うのである。平素の気難しい博士と宴席のさばけた態度の博士の対照に興味を持ったのである。同じ博士でも医博には多芸多能の人が多い。奴さんぐらいを踊ったからと云って多芸多能とは云えぬが、奴さんを気軽に踊ったさばけた態度が医博を思わせる。芸の巧さは問題ではない。

〔一五二〕

甘党は女の方の中に居り　（美笑）

甘党と云われるほどの男は、知らず〳〵辛党からのがれて女の仲間入りをしているものである。どこやらのおぜんざいがとか、どこやらのみつ豆がとか、女と話がキッチリと合うからである。

しかし、こんな男は案外女からはもてぬものである。いろだとか、恋だとか云うことになると又別であるらしい。この句は写生句として成功している。

〔一五三〕

忘れてはいないが借りたまま五年　（十九平）

すぐにも返えすように云って借りるのが金である。その時にはたしかに、そう思って借りたのであるが、そうすぐに返済出来ないのも金である。月日はグン〳〵流れるが、金の方は返えせそうにもない。別に返えすのを忘れているわけではないが、借りたままで、もう五年になる。金なんか借りるものではないと今頃になって気がついても、もう遅い。返えすものを返さねば、何んとなくユウウツである。斯うした心境をとらえたのがこの句である。

〔一五四〕

好きと好きならばと母が先ず折れる　（草一郎）

新しい憲法が出来たからと云って、すぐに、家の組織が無くなったり、男女の結婚がすべて二人の合意だけで成立するものではない。世の中はそう簡単にはいかない。矢張り親は親としての云い分がある。二人にしても経済的独立の出来ない以上、親を全然無視することも出来ない。が、しかしまア好きな仲なら添わしてやってもいいでしようと先ず折れるのが父ではなくて母であることはこの句の示す通りである。穿ちの句である。

〔一五五〕

虚子の名も知らない胸の議員章　（正郎）

肩書と云う肩書を掻き集め、どんな会合にもノサ張り出て一席ぶつのが、胸に議員章の オ偉ラ方である。そのクセ虚子の名も知らない非文化人であると云うのが、この句のネライであって、これも穿ち句だと云える。

作者は「虚子の名も知らない」と云っているが、これは必ずしも虚子でなくてもよいのであるが俳句の代名詞として虚子の名を用いたのにすぎない。つまり俳句が何んであるかも知らないと云う代りに虚子をもち出したのでここに句としての表現技巧の妙味がある。もう一歩つきすすめて云えば、俳句が何んであるかを知らないは文学が何んであるかを知らないと置き換えるべきであるが、それを俗にくだけて俳句にし、虚子にしたのである。この句は世の政治屋さんにとっては痛い句である。

〔一五六〕

しやなり〳〵十半の足袋で来るおかま　（一鳳）

おかま（男娼）を詠んだ句は珍らしいが、この句を一読するといかにも美人気どりで歩いているおかまをビシャリとやっつけているところに特に興趣を覚えるのである。顔も美しい、姿も仇ッぽいにしても、足袋の十半はツヤ消しである。思わず吹き出さずにはいられない句であるが、ムリにくすぐって笑わさないところに作者の手腕をみとめねばならない。上の齣「しやなり〳〵」もこの句を生かしている。

〔一五七〕

先妻の子に学問が出来すぎる　（玲人）

後妻と先妻の子ども——問題は単純ではない。大きな悲劇が生れぬまでも、多少の波瀾はまぬがれないのが常である。

この作者は先妻の子が学問が出来すぎると云う一事をとらえている。そのウラには自分の腹を痛めた子の凡庸さを思わされる。タッタそれだけのことだけであるが、それは氷山の一角を見せたのに過ぎないのであつて、それからそれへと想像させる構想は凡手ではない。ある深さをもった味のある句である。

〔一五八〕

矢印の通りに曲るモーニング　（三司）

矢印とモーニング、文字の上ではそれだけである。一読すると何んの変哲もないようであるが、案外面白い句だ。

「何々家」への告別式にのぞむモーニングがゾロ〳〵行くさまが、タッタこれだけの描出で眼に浮ぶではないか。川柳の表現には特にガンチクが必要であるが、この句のように、単純な素材でガンチクのある句は珍らしい。

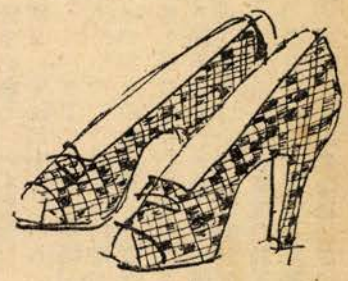
正誤

▼五月号二八頁三段一〇行目「とも角も」の句主は六龍子につき訂正▼五月号六頁二段一二行目「保守党を」の句は類句に付抹消する

アサヒビールは
あなたのビールです
朝日麦酒株式会社

女性柳人の地盤

品川陣居



古川柳にはどのくらい女性の作品があるか、このことはいままであまりかえりみられなかったし、また古川柳の発表紙としての万句合などにも、その確証があるのかどうか、専門学者もこの点については今までふれていないようだ。したがってわれわれにはこの点にかんして何も知られていない。

明治以降川柳復興の波にのっていろいろの流派が、擡頭してきたが、女性川柳はあまりふるわなかった。だが極く少しは、主人が作家であった契機でその妻君が、主人にすゝめられて作りはじめたという特殊なのや、そのまた妻君が周囲の若い女性にすすめて小さなグループを作ったというのなど二、三あるにはあったし、また現在でも一、二はある。

大体において何故女性は川柳を作らないのか。男性の作家に比してその作品が劣るというのか――それには作句年限において女性は男性よりも継続性が短いという制約もあろう。家庭という瑣雑な仕事をもつ女性の運命が、長い年月継続して作句行動をとらせないというのが、その主なるものであろう。

全国各柳誌をみても同人ないし投句者として比較的長期間作品を発表している人は極くまれであり、ぼくなど、どの人がどの位の川柳歴があるのかわからないが、とにかく女性名が発表される句数は、ごくごく小数である。

そういう小数の女性柳人の中で、本誌の麻生主宰夫人**霞乃**女史や令嬢**梨里**氏のごときは別格といってもいゝほどだし、「おかざき」の女性主幹**稲吉佳晶**氏のごとく三週年記念大会を最近もった川柳心酔家もあって、大いに川柳のために気を吐いているが、現在のところ異数に属する人々である。

この外、永く御無沙汰になっているのでその消息を明らかにしないが、静岡川柳の榎田柳葉女史、井上剣花坊未亡人信子女史、大阪のダークホース脇田梅子女史のごときは〃巨豪〃というていゝであろう。

しからば現在の女性柳人は、どういう作品を発表しているであろうか。手許の柳誌から少し挙げてみる。

なるようにならぬ浮世を思い
すぎ　佳晶

口閉じてからの女の強き意志
〃

米櫃を満たす笑いの指太し
〃

ひゞの掌に指環は遠きものゝ
うち　〃

ひゞ哀れ水に親しむ女の掌
〃

この句は、とくに佳晶氏の代表作というのではないかもしれないが、いかにも中年夫人の〃生活〃がにじみ出ている。これらの作品から〃時代〃を感じるということはないが、さりとて〃時代〃から離れているともいえない。何故なら女性の〃生活〃は〃ひゞの掌〃に具象化されているからだ。日本の女性からこの〃ひゞの掌〃を追放することは尋常なことでは不可能である。

生活に詩があるかないか――ということは、実は文芸の基本命題であるが、今日の文芸――最近の小説（長篇短篇を含めて）をよんでみても、フイクションで読ませるものには、何か作者の〃発想〃や、〃意図〃に浮き上ったものが感じられて、その小説を完璧なものと賞揚するに至らないが、〃私小説〃と称するジャンルのものからは、何かしみじみとしたものが感じられて、身近な親近感がある。ところがこの私小説というものは日本独特の小説のジャンルで、一部には小説というより随筆といった方がいゝという紅毛批評家のコトバが、さいきん、もんだいにされているが、このことは川柳の方にも結びつけられる〃考え方〃であるかもしれない。

日本に私小説というジャンルが亡びないかぎり、川柳が〃米櫃〃や〃ひゞの掌〃を句材にすることは止まないであろうとおもう。

だが、ひゞの掌をいとしがる作者は一方に「口閉じてからの女の強き意志」と、その日常性へのフンマンというかレジスタンスというか、柔肌に鎧うものゝあるのを表現しているのは見のがせない。こういう女性としての意志が、本当は強いものか、どうか、強いといっても、それは男性への抗議にすぎないものであるかもしれないが、男性として女性の〃口閉じ〃た強さには、少し失礼ないい方をすれば手を焼いているのである。大きくいえばそうした女性の強さに曳きずりひん廻されることのテーマで、古今の文芸が生れているのだといってもいゝであろう。これは大きな文芸作品の素材ともいえそうである。ぼくとしては素材結構頂けるのであるが、もう一歩すゝんで、その女性の強さが男性をどう支配するかを表現していたら完璧だがナと望蜀するのである。

気丈夫な女露店を風に張り
信子

冬木立昨日の疵を撫でながら
〃

故郷の甥は銀行員で老け
〃

地平線明日あさってと歩かせる
〃

頼る子に頼れず夫婦夢語る
〃

三城信子さんの作品は、これまでしばしば鑑賞してきて、相当感心しつゝあった。というと失礼だが、東京のある句会でよくおみかけしたぼくは、その令嬢と共に在る親娘作家の風姿に好印象をうけている。ていねいにぼくなどへもあいさつされるような、しとやかな方である。

いま、あらためて最近作に接してみて、やはりある程度感心させられる。好作家の常として、とかくてらいのある人が多いのにこの方にはそれがないようだ。

第一句の如きは嘱目のスナップであろうが、この作者の〃気丈夫な〃一面を、その露店の女にみとめたとして、それを〃風に張り〃と引緊めたところ凡手ではない。——わたしも、そういう境遇だったら、という雄々しさがでている。

第二句はちょっと心にくい作品である。〃昨日の疵〃が何をイミするか深くせんさくしないとしても、〃冬木立〃であるからには寒々しい感じがのこる。その〃疵を撫でながら〃ものおもう女性の姿は痛い回想にとりまかれているようである。女性句として深さをもったものであり、すぐれた作である。

第三句も何気ない表現でいながら、その甥御さんが銀行員であるのがいゝ。おそらく浮貸などおもいも及ばない田舎の堅い銀行員であろう。

第四句も巧みである。〃明日あさって〃と重ねたところ心憎いばかりである。女性の行進である、だが地平線というものは何処まで進んでいっても無限に前方にあるものである。限りなき前進——女性の雄々しい息づかいがおもわれてたのもしいが、一面、女性の宿命というような哀れなものも感じさせる。とにかく秀句である。

第五句は、これは戦後の一般老人のなげかいであるが、その期待外れをいたずらに悲しんでいないで〃夫婦夢語る〃と結んだのもいゝ。新しい時代への覚悟である。

蜃気楼と思へ財布も人も樹も　葭乃

脊に腹はかえられず此処も屋根を葺く　〃

女の友情ながい〳〵手紙書き　〃

注射マニアの奥様に日の永き　〃

事務多忙一輪挿も邪魔がられ　〃

麻生葭乃夫人のお作をこゝに拝借して、ひとつ考えを廻らそうとするのであるが、さすが主宰の夫人だけあって内容豊富である。それだけにこんな短章では、ぼくの貧しい考え方をいくら布衍しても言いつくせるものではない。だが、こゝでは句評をもくてきとしているのではないのであるから、ともかく女性柳人として、どんな立場にいられるかを証明——もおこがましいが——してみよう。

第一句の蜃気楼とおもへ——財布も人も樹も、とあって、これは一句として鑑賞するには意識過多におちいって困難である。財布も——人も——樹も、蜃気楼とおもえということは、夫人の美意識の多面性をあらわしているようである。だがこの一句が絶対に川柳であるのは〃財布〃の介在である、だが財布も蜃気楼とおもえ、ということになるであろう？たんまりふくれた財布の豪華さ、それが空中に高く虹のごとくかゝっている——この美しい感じはわからぬではない。だが蜃気楼はいつまでもその姿を空中にはとゞめていない。とすれば、そうした栄華のはかなさを謳ったのか——葭乃夫人ともあろう方が、そんな句想でこの句を創られたとはおもえない。だが、女性として、ことに大阪というおカネの国柄、ふくれ上った財布への祈りをも、蜃気楼のようにたゞ美しとのみおもわせようとする自制——そうした関西魂（だまし）への反撥。とまアぼくはぼくなりに考えてみるのである。

人も——樹も、はわかる。とにかく葭乃夫人の心境にふっと虹のかゝったときの制作であろうが、女性句とはいえない高さがこの句にはあるのである。

第二句についても考えてみたいのであるが、また持って廻ったことになりそうだからやめておくが、以下の三句には何もいうことはない。

そこで今日の女性柳人へのぼくの考え方に結論をつけてみると、全国各柳誌面に現れる率は少ないけれど、在来のように女性でなければという発想から創られたものではなくて、まさに男性作家と比肩して同じ足場に立っているということである。男性作家が、その柳歴に物をいわせて、ともすれば詩魔にとりつかれたり、フイクションに流れる傾向があるのに、女性作家は〃私小説〃のジャンルを守って女性としての人間性を確立して行きつゝあるということである。だがそういっても麻生葭乃夫人のように男性作家を瞠若たらしめる方もあるにはあるが……。

そこでぼくの女性柳人へのお願は、もっと川柳を創って、われわれの前に誇示してもらいたいことである。——女性らしくあれというのでは、もうないのである。男と女と人間が在るように、男と同じ地盤で創ってもらいたいのである。そして、そういう時がすでに近づきつゝあるのであるから…。

（四月一日）

同舟近詠

松山市　前田伍健

鳩山流ですかと女将受流し
二科展をこわがって出るお婆さん
パチンコ機どう変ろうと釣られに来
野球挙宗家と言われ起たされる

大阪市　橋本緑雨

月賦が重なり合う服が出来
友達と二人で室を煙にし
ボーナスからボーナスに日は遠し
ふるさとの酒へ俗用多すぎる

公会堂落成式に長女初舞台白鳥の湖に出演

花束へお袖は長い方がよし

長野県　高峰柳児

家業継ぐこと先生に惜がられ
別席になると役得くだけて来
雨ついて来たのを女恩にきせ
副業の方はネクタイ掛けて出る
晩年も遂に恵ぐまれぬ疎開先

東京都　阿部佐保蘭

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

そこんさこはマア〳〵と女将蓋をする　岡山縣　梶尾　節子
ブルースに変りドラムの生欠伸　同
思い出も多かろ古着にしみがあり　同
耳よりな話刑事はバット買う　同
真人間すぎて女に馬鹿にされ　同
倖せは君がこんなに嫉いてくれ　同
みちたりた生活万年青を筆で掃き　豊中市　加納山茶花
蛇足の多さ母も老いたり　同
イソップの蛙の愚だと悟れども　同
異性とはよきものなりへみんな和し　同
生活のきびしさマンホールの掃除　同
嘘を云う人と思えぬオチョボロ　平田市　久家代仕男
何食わぬ顔で尾行のサングラス　同
ライカーが好きでとびんぼけばかり撮り　同
断崖をカーブ名所は気が疲れ　同
天主閣ネオンアーチが気に食わず　同
押して呉れた人積み残し発車する　大阪市　藤村　梨花
ピエロにもなりましょ嬉ぶ人あれば　同
容赦なく内気な娘にも出るニキビ　同
青春期過ぎてクリーム色の恋　同
喋らせておいて知性の教養の　同
小首なぞかしげて恋のしぐさする　大阪市　板東千代美
瓢箪のような顔して囲うとき　同
菓子皿の色もあんたの好きなもの　同
嫁しづいてしもたらと言う気にもなり　同
迷惑なギターと知らず二階弾き　同
誘惑の打診ボートに突き当り　貝塚市　宮本　甲馬
正直に書けば官庁突き戻し　同
窓ガラスたまに視察が来て欲しい　同
二つ頼めば一つ忘れる附添婦　同
パーマなとかけて病気を忘れよう　貝塚市　護川　稍月
あの服も月賦か靴とつりあわず　同
医療扶助うけて福耳まだ信じ　同
紅一点とはかさ〳〵のおばあちゃん　同　小浜　牧人
才人のあやつる才へ敵が出来　西宮市　同
大学を出せば家業を継ごとせず　同
足音へ身づくろいして待つくらし　同
花の下一升瓶で酌ぎこぼし　同　南部ひでを
親切に教えてもらって乗りおくれ　玉野市　同
貸ボート一人で乗ってやけに漕ぎ　同
鶏小屋を作って妻に見直され　同
パチンコを笑えぬ俺になり下り　同
赤い爪鍬の重さはまだ知らず　和歌山縣　秋月　宏方
金借りるコツは知らないまゝでも　同
白髪もうあるのにパーマかけに行き　同
新柄新柄マネキン嬢は浮気者　同

雑筆春秋

仮説浦島太郎

山根白星

まだ親切、憐憫、それに対する恩義、報恩、と言った美徳が存在した頃のそれは〳〵昔の物語です。浦島が陰徳、直ちに陽報となり、亀君の脊に亀乗して竜宮を訪れるまでのいきさつは余りにも人口に膾炙されて居ります。

さて浦島はタロチャンと呼ばれた腕白時代から真珠、鮑、蠑螺取りで鍛錬したお蔭で相当に肺活量も大きくダイビングの自信もあったらしく、

亀の脊の疲れ竜宮城が見え
龍宮が見えて呼吸が楽になり

ほっとした様です。

竜宮は、昆布の林抜けた奥

竜宮に通ずる参道の両側には手入れのよく行届いた昆布林が鬱蒼として居ります。

「降亀」の立礼のある玄関口で亀君に厚誼を謝し、亀君はガイドの大役を勤め終えた安堵で、いそ〳〵とガレッヂに引き揚げて行きました。

竜宮に来て釣竿を頒かられ

認印のこれは娘を売る証書　米子市　須藤　鉄平
女優さん離婚も芸の幅だとさ　同　同
俺に似た蚯蚓で土を這って生き　同　同
絵葉書で桜知らせる軽い義理　同　淵川　秀敏
ピンボケに撮すカメラに皆立たせ　熊本縣　同　同
日曜が春のプランへちと足らず　同　同
酒屋にも臨時雇が来てる春　同　梶川　蘇堂
下駄箱も整然として新家庭　同　同
嵐山こんなところで蕎麦を売り　吹田市　同　同
乗りついでどんぶり飯が二度続き　同　同
春日遲々と保線工手のいゝペース　同　同
見向かれもせず駅頭の桜散る　同　藤井　五茶
ボロかくす合オーバーとは知らなんだ　倉敷市　同　同
空ビンごろ〳〵呑助の家らしく　同　同
モデル代よこせと象も言いたかろ　同　長野　文庫
便利大工今日の仕事を明日に分け　今治市　同　同
分らぬが兎に角ほめてやる個展　同　同
嫁の荷の前で結婚改善論　同　酒井ひか平
チュウリップアネモネ軽いトースパン　兵庫縣　同　同
こそ泥も空巣も春の顔をして　同　同
花吹雪今宵は恋を語りたし　同　阿部かつみ
ムッとした腹へ茶漬を流しこみ　貝塚市　同　同
自己診断どの広告も当はまり　同　同
幸運に頼るクイズのはがき代　同　同
質草はもう何もない子が残り　郡山市　同　藤田　凡々
悟りとは妻の小言を聞き流し　同　同
生きて行くだけをラッシュへ流れ込み　同　同

連休に降られて鼻毛抜いて居り　神戸市　仲どんたく
子の怪我のあと怪我の記事多くなり　同　同
二百万かけて二号の茶室建て　同　東浜　成詩
へんこつな床屋が美男にしてくれる　西宮市　同　同
春の雨妻にセリフを言わせたい　同　同
くねらせた首が器用に御返盃　同　安平次弘道
嫁ぐ気になったら縁談が遠のいた　山口縣　同　同
嫁貰え〳〵と俺の事かいな　同　同
憲法の保証じゃ食えぬデフレです　同　同
働けばこんなにもなる掌　滋賀縣　同　土守トン坊
女房も大切な客の猪口をうけ　同　同
フレンドのまゝで一年半も経ち　同　同
手も足も口もミシンはよく動き　貝塚市　同　柿原おかき
算盤の達者な妻でへそくれず　同　同
寝てろ〳〵と云う面会が気に入らず　同　同
体温計の目盛楽しい恢復期　大阪市　同　安井　久子
元気ですを訪ねてみればまだギブス　同　同
明日使う千円札を温める　同　同
入居百戸総出でつくし狩りになり　大阪府　同　早川　野甫
ざあますの箱根以東はまだ知らず　同　同
結婚の口看護婦してゝ待ち　同　同
清貧に又子宝を授けられ　岡山縣　同　宗高八ッ茶
惜しそうに月給袋から払い　同　同
悪友に女房教育批判され　同　同
寝ることを倖にして父老い給い　宇部市　同　上林　粗影
謡曲が流れる路次に元中佐　同　同
これは又見栄で値切っている男　愛媛縣　同　村上　旭童

竜宮では言う迄もなく禁漁です。其処からは、

浦島は真珠の砂利を踏みそびれ

出迎えの腰元達が、口に掌を当てゝ笑い合ったことでした。

竜宮の家老に海老が控えて居

ジエツト機のイカは乙姫様護衛

乙姫は勿論傾城傾国の窈窕たる美人です。

彼女の丁重なるもてなしは申すに及びません。

竜宮でビタミンCが不足する

竜宮の膳にわさびが欲しくなり

山海の珍味……オット残念ながら此処には、山の幸が見当りませんが、乙姫の弁明と接待はそのハンディキャップを補って余りありました。

浦島は鯛の舞踊を所望する

乙姫は浅草苔で鼻をかみ　（古句）

酒池肉林で、連日連夜を遊び呆けました。

竜宮の亀は別間で欠伸する

竜宮が祭り不漁の日が続き

浦島が来て、地上では失業する漁師が続出しました。後で見たり聞いたりした事ですが

竜宮の裏は珊瑚の林なり

竜宮は珊瑚をくべて飯を焚き

浦島が溜め息をついたことでした。斯るユートピアにも、矢張り

海賊のたこは難破船に住み

捨てゝいゝひな人形を又かざり　同
補聴器をかけ老人向き直り　同
落選をして落ちついたなぞと嘘　大阪府　石川ひさみ
口笛で逢に出るほど惚れていず　同
靴磨く子もあり駅は春のひと　同
素うどんで腹こしらえて逢いに行き　天理市　菱田　満秋
花の種貰って休日労働し　同
恨んでくれ憎んでくれと嫁く女　大阪市　三好　澄泉
浩吉に母娘二代で熱をあげ　同
酒好きがしんみりと言う酒の害　米子市　福代天邪鬼
議員なら二期連続と病み続け　同
薯づるに頼んで給仕に使われる　高知市　有友　玲羊
うまそうにポリスも闇の飯を食い　同
妻として仕え女としてねだり　廣島縣　高島　玉兎
子供の日主役は膝で寝てしまい　同
猿沢の鯉になりたい失業者　天理市　吉田　季生
菜の花が遍路の笠に差してあり　同　新井　酔子
切れる気の心斉橋で待たせとき　西宮市　同
恋人をじらすつもりを真にとられ　同　持田　勉
はいと言うだけへオペラの長すぎる　島根縣　同
帰郷して赤旗振った手を見せる　同　和田一乃字
上戸には昔なつかし丹波焼　大阪市　田中無津美
串カツ屋女の足もまじって居　同
ボーナスが化けた一家の楽しい日　和歌山縣　同
二等車はみな二人連れ春の旅　同　勝田　正郎
破顔一笑約束は忘れられ　米子市

人形のように来賓席につき　同
恋人はないが見合に気乗りせず　兵庫縣　出口白猫児
年に似ず謡で馴れている正座　同　平山　港雨
陶酔は名曲でなし君と居る　貝塚市　同　佐藤千代春
失業のせめて屋台の灯に和み　同
坊さんが来た〳〵釣師道を替え　倉敷市　同　内田　秀章
公約はお伽話だなと思い　同
予想表見ながら無料バスを待ち　岡山市　同　伊藤　定美
仕返しを来年に待つ四月馬鹿　同　岩田十三楼
愛情の打てば響いた日もありき　大阪市　同　本多　省三
感受性するどい君の眼を恐れ　同　小田　紫草
棟梁と意見がおうた三リンボ　福岡市　同　田淵　正平
未だ酔いもせぬのに唄う春の酒　同　野村　初甫
ストライキ終れば花も終りなり　大阪市　同　福島　丁丙
手ぶらでも行けず持ってはなお行けず　同　金井　文秋
片思い酒は涙かばかり弾き　岡山縣　同
共稼ぎ姑は玄関まで送り　同
禁煙をしてもパイプを捨ておしみ　岡山縣　同
故郷が近く夜汽車の窓を拭く　同
人間国宝十六ミリへしもうとき　大阪市　同
家出して親にないしょの恋が知れ　同
サークルへ紅一点になりにゆき　貝塚市　同
卒業の価値をデフレで叩かれる　同
俺に似た強情時に頼母しく　大阪市　同

秋篠寺

デッサンへポーズよろしく技芸天　同

的部などの外敵もあり、内にも

竜宮の鰯は封建性を忌み

厳然たる階級制度は斯る不平分子を温存していたのです。或る日のこと、乙姫が庭を散策して居りますと、

乙姫が奥へ逃げ込む土左ヱ門

なる事件が突発し、乙姫が恐怖におののいてエネルギッシな浦島の胸に抱きついて来たのでした。やがて土左ヱ門を護衛のイカ達が、サルベージの作業の様に、浮葬してから、

処置されてからの抱かれた眼のやり場

乙姫は珊瑚色に頬を染めました。それ以後二人の仲は急速に進展したと申します。

竜宮での一日は地上での一年です。ですから乙姫は、芳紀正に十九歳と申して居りましたから、地上数えでゆきますと六、九三五歳になる勘定です。浦島にとっては竜宮にはカレンダーもありませんし錯覚が此処にあったのです。

乙姫は地上数えて婆なり

それはさておき、友情の域を越えた乙姫、浦島は竜宮閣議で大変な問題になった様です。曩にも申しました様に封建的な所なので、竜宮の長老連は浦島の滞在をこれ以上延長さすのに咎かだったのです。竜宮で夢の様に過した一ヶ月が三十年でした。ですからたとえ浦島が既婚であり、乙姫と手に手を取り合って地上の人になったと

新築に移ってからのきれい好き　岡山縣　鶴見　松太
はいいゝえクイズの様な見合をし　同　山本　春也
上の子は嫁取り下の子はまだおむつ　倉敷市　同
金がもの言わぬ相手に腹を立て　同　前川左文字
スライドへ彼女の笑顔独占す　兵庫縣　同
灰皿へ捨てずに耳へはさんどき　同　藤田　和笛
湯疲れが出たとはもったいない話　高砂市　同
景気とは別な花見の砂埃り　同　吉原　紅月
離床許可桜はすでに散った後　兵庫縣
末弟大学に入る
角帽をきてもやっぱりたよりなし　同　山口　富村
あてられる席へ西陽がまともなり　大阪市　同　坂手　有子
断乎斗争平和主義者が指令をし　同　深見　雅堂
新婚だからと二次会袖にされ　岡山縣　同　米沢　暁明
アベックは女の好きなすしを食い　同　藤井　千年
満員車女ニコヨン姦しく　大阪府　同　越智　一水
立ったまゝ吊革で寝る芸も持ち　同　山田スミ子
計画は補助がとられる様に書き　愛媛縣　同　長尾　越鳥
飛行機で賞状渡すだけの旅　同　岩原　箔川
ペン〳〵草の生活力が屋根に生え　天理市　同　増本　夢人
啄木をひし〳〵と感じ金を借り　同　篠井しの女
想像にまかすと新婚言うて逃げ　令治市　同　石原　文郎
誕生で灸が有るのも伊予育ち　同　久保田青竹
千円を使う子連れの春日和　廣島縣　同　木下　一休
味噌汁へ故郷の幸が浮いた朝　同　景山　綾美
魅力あるポーズへ邪魔な雲が浮き　倉敷市　同　松島　不在
頑丈で妻子二人が養えず　同　野田ポン太郎
裏長屋通夜の隣りでジャズがなり　宇部市　同　藤田　美雪
背なのだけ持て余すのに又孕み　同　迫田美婦道
山寺へ婆婆を持ち込む派手な客　大阪市　同
まあ一杯禁酒したのが注いでくれ　同
PTA教師の恋をとり上げる　倉敷市
何事も夫にすがる屠蘇を酌ぎ
肩で風切って六頭身が行き　岡山縣
ニコヨンの不平云わせぬ子に育て
表彰の男まさりにマイクが来　和歌山縣
冗談のうちに註文取っている
斗病の療友は生き抜く趣味をもち　和歌山縣
父兄会母の背伸へ良い答
錦着て母国へ観光客が来る　島根縣
申告書の嘘へ税務署残業し
家業には大学なんかいりまへん　大阪市
悪趣味を自慢している廻り椅子
くるま座の凡人の話まとまらず　神戸市
溜息へとなりが派手にお富さん
洋裁に通うドレスを縫いにやり　玉野市
百円も使って映画で泣いて来る
寮の空鳶の自由があるばかり　岡山縣
釣竿のありばいを見に魚がとび
草餅の腹を朝から空けておき　岡山縣
誤診とは言わずビタミン続けさせ
わだかまり取れて花瓶の水も替え　岡山縣

しても二十世紀に見られた。『二人妻の悲劇』なんぞと言う野暮な事態は起らなかったに相違ありません。かくして帰途についた浦島は

玉手箱油断をすれば浮き上り

あわてゝ抱え直した一コマでした。帰国して

浦島のアナクロニズムを皆笑い

時代は変っていたのです。只何故乙姫は愛する浦島に玉手箱なんぞを土産に手渡したかは、文献がないので定説はありませんが、「絶対に開いてはいけません」の思わせぶりな言葉は浦島の「好奇心」には無役であるに違いないとの微妙な人間の心理を洞察した乙姫の、はかない「計算された嫉妬」つまり爾後永久に空閨で過さねばならない乙姫の、浦島の逞しい肉体への「絶ち難い妄執」と言う見方が強い様です。

空閨の嫉妬を玉手箱に秘め

であった様で厳密に心理的に言えば、

竜宮を貸借もなく引揚げる

ではなかった様です。

にぎりめし

福田山雨楼

路郎先生もバクつかれた。紋太氏もバクつかれた。杏三氏もたしか居たと思うが頬張った。筆者も舌鼓を打った。外でもない純白のにぎりめしである。

立話傘の雫へ気を取られ　同
相談欄A氏と関係断ちなさい　出雲市　原　章坊
頼みに来られた方もおられた選挙場　同　鈴木　鈴彦
蓮根の穴が気になる会計係　貝塚市　同　大橋　游子
老らく屋仇名嬉しく暮らすなり
代読は大臣らしい声も出し　岡山縣　同　辻　圭水
二階からチャンバラ見ぴっこの子
親馬鹿は試験官にもなってみる　堺市　同　橋本白郷子
恋人が休んで仕事はかどらず
師匠留守ジャズ弾いてみる三味線　松江市　同　大塚美能留
永病みに飴玉頬ばる父となり
人形を持ってないのではねにされ　岡山縣　同　西岡　洛酔
長男がもう役に立つ時計巻き
二号の娘父は死んだと教えられ　大阪市　同　万濃　修
闘病に手首毎日にぎって見
春たのし筋はどうでもよい映画　松阪市　同　小田　柳叟
夕焼の中で雀等よくしゃべり
邪魔になる程病室花の鉢　貝塚市　同　御戸　凡平
診断書乱暴な字で開放性
投票日までを威張れる票を持ち　廣島市　同　久保　和友
回復期にわかに専門書が読まれ
停電のお蔭反省する時間　滋賀縣　同　西本　保夫
放浪の旅が文学など書かせ
家事都合どうしヨッチャンへおぶりつき　大阪市　同　池田　正斗
パン喰っているのが皆んな俺の子だ
アドルムでえんまの嘘をきいてくる　大阪市　同　加藤　向水
靴みがき手をあたゝめて磨き足し　同　大町　別城
ストロさえ見放されてる左り前　新居濱市　同　小島さぎす
今更に結婚式でもない二人
水清い故郷の人が冷たすぎ　岡山縣　同　加川　靖真
ネオン未だ午前零時へ明滅し
黒髪の嘆き赤毛に仕立てられ　貝塚市　同　山田　凌甲
平凡を読んで嫁の座つゝがなし
サイン帖行儀の悪い字が並び　山口縣　同　中屋　すず
ブラジルへ行こか二男の気の弱さ
初産にケープ売りたい程貰い　金澤市　同　南川　光男
動かないバイク見ていて叱られる
末の子は姉になる人ちょとのぞき　尼崎市　同　武部　若菜
失業の今日も雨戸の開かぬまゝ
街角で汚職候補はまくし立て　佐賀市　同　橋野　清花
ほんものの刑事が舌を巻く度胸
天候異変へ科学つめたし　大阪市　同　竹内花代子
　　甲芸術大へ入学して
合格へこれから親の汗続く　同　入口　富夫
神様を信じてからの家の不和　大阪市　同　飯尾寄与史
残業をしてさえ妻にうたがわれ
春の宵夫の炙へもぐさもむ　大阪市　同
親の気も知らず短大まで進み
柄よりも値段亭主の気に入らず　大阪市
いゝ人が出来て嬉しい姫鏡
手を吊っていても大将して遊び　神戸市
後妻来てはたきの音が良くきこえ

選挙実話

長野文庫

それは月評の夜のことであった。当時不朽洞は南海沿線玉出にあって、毎月その二階で句評会が開かれ、熱心な討論が行われた。葭野奥さんはいつも接待役でお世話下さったが、当夜は思がけなくもゴマ塩入りのにぎりめしが出た。その頃の飯はうまかったが当夜はみなよくしゃべったので特においしかった。山海の珍味にまさるご馳走であった。

大きなテーブル。大きな火鉢、明るい電灯、三十年近くも経った今日、当時のことを思い起すと自分は懐かしくてたまらないのである。

「選挙が済んだから市の補助をうけ度い」と云って市役所の社会課へ申し出て来た男があった。市の吏員も初めは一体何のことやら分らなかったが、根掘り葉掘り尋ねて見ると衆議院選挙以来ずっと選挙事務所で飯を食って来たが市会議員の選挙も一応終ったため生活が出来なくなったから、今後何んとかして呉れと云うのである。

失職でなく失食の選挙ボス

それもその筈、一月には知事選挙があり、二月には衆議院選挙、三月は無かったが潜航選挙活動、四月には県議選、市議選と重なり選挙運動員は休む暇はなかった。

仲人がほれてる見合義理をたて　岡山縣　佐々部滿佐志

地方選挙

元校長教え子の票よんで立ち　同

値下りの日から牛乳とパンの昼　貝塚市　津田　千舟

聴診器持つ手に今宵マンドリン　同

あのヒスでよくまあ旦那かじをとり　岡山縣　山田ゆき江

母さんは器量望みで来たという　同

なぐる真似させて嬉しい顔になり　河内長野市　森本黒天子

スト解除駅は素直な顔になり　同

最近は肩も叩ける夫なり　尼崎市　林　澄子

窓をあけ雨の熱弁きいてやり　同

好い味を知ったか三度県議に出　高知市　岡本　元馬

嘘もよし双方許す気にさせる　同

安静をしているような春の海　天理市　仲野花鶴美

気やすさはトイレットまで誘いに来　同

遠縁も歩みつくして職がなし　岡山縣　阿部　四郎

ビニールに西瓜の虫を守らせる　同

うまいものは宵に食えとや猫にやり　大阪市　右本　一子

へそくりの姫鏡台が美しい　同

芸が身を助け思わぬ椅子につき　山口縣　岡本　鳥石

依願免で都合によりとは書かず　同

畳の目ついたズボンにブラシ掛け　鳥取市　北村　三歩

仁丹を買って夜行に母送る　同

背を向けたままで按摩へ礼を言い　岡山縣　浜口志賀夫

曲射砲の様に朝湯で義肢を上げ　同

福助はしびれが切れたとも言わず　岡山縣　泉木　太八

鐘撞いてから通訳はよく語り　同

東京は昼の歌舞伎へ暇な列　東京都　前山　北海

指圧習う力が欲しい細い指　同

一匹の金魚も春のヒレで揺れ　岡山縣　岡　一門

斗病の一つに堆肥切りまぜる　同

御苦労の一点張も老課長　岡山縣　藤原　民徳

病人の好みで一家の味をつけ　同

ビニールの傘傾けて待つも恋　岡山縣　大石　一久

就職を祝うネクタイジミな伯母　同

恋人に抱かれた猫が羨ましし　大阪市　橋本みどり

頬染めた見合へ春の陽がこぼれ　同

我も亦こゝへ来るかと墓掃除　大阪府　岡島　孤舟

叱られる方が勝ってる子の喧嘩　同

ネクタイをしめて親方どこへ行く　宮崎市　野口卯之助

子沢山市電で行ける花に決め　大阪市　児島与呂志

療養のベットの夢路妻に子に　和歌山縣　中　精風子

来年の予算に入れる洗濯機　和歌山縣　田中　能子

歌の文句やたらに使ってるレター　岡山縣　田淵　喬

たまさかの着物女房が着せてくれ　倉敷市　野田　一念

悲しみは実のらぬ稲が掌に溢れ　倉敷市　船曳　呑張

一団の酒勢夜汽車をかきまわし　出雲市　三吉　美好

馬鹿になるのにも男は酒を借り　鳥取縣　山根　素瓢

病人のベッドのかげで鮨を食い　岡山縣　宗森とも子

片仮名が先だ後だで飯が食え　大阪市　中野不二夫

麦の伸び旅の話題にするつもり　廣島縣　山田　翠陽

くど〳〵と赤字のわけを税吏ききき　岡山縣　佐藤　正志

正規の運動員は勿論、自称運動員も三度々々食う事に関しては不安はなかった。平素麦飯ばかり食って居る連中も悠々と白米にありつけたのであるが、選挙が済むと全く木から落ちた猿同様一杯の残飯もあてがって呉れない。

投票が済めば皆さまなど云わず

一種の無料給食所、失業救済所であった選挙事務所には上中下の三段階があって、誰でも飛込んで食える大衆食堂型、菓子と茶がつく中ボス食堂、何時でも酒がある将校室と三つに分れて居る。大衆食堂へは本人の一票さへ怪しい連中がワンサ〳〵と押しかけて大賑いを呈して居たが、選挙とは随分無駄なことに金を散らすものである。

食う時の選挙事務所に漲く気勢

そんな選挙して居乍ら選挙が済めば、どの候補者も判で押した様に「金は殆んど使わなかったと」自慢気に語って居るが、これは商売人が税務署へ正直に売上げを報告しないのと同じで全くお笑い草である。

公定の選挙費一日分であり

或る候補者は応援の某名士の推せん演説が済むと「私は何にも知らないものですが、只今○○さんが云われた通りの男であります。何分よろしくお願いします」と頭を下げて引込んだが、この人が市議に当選した。

有権者の中にも馬鹿が多数あり

吠えられて襟の銀狐をかばい　西宮市　片山　鏡水
溜息は息止む日まで続きそう　岡山縣　池田　古心
のろけだけきかしてチップ出しぶり　岡山縣　池田　文女
どの穴も皆パチンコの穴に見え　群馬縣　荻原　竹郎
ニコリともせぬ売店でようはやり　京都府　柿本　古竹
特選に入りモデルの顔も売れ　金澤市　松永　恒青
下駄箱の隅に軍靴は忘れられ　金澤市　竹森　充六
私鉄スト又大阪が遠くなり　貝塚市　今井　東子
合併へ賛成反対女風呂　石川縣　山崎　北柳
炭酸を呑んでも酎は止めぬ気の　倉敷市　小野　広志
美男子がにくまれ役の村芝居　大阪市　植村弘一郎
夕食を待たせたまゝで糸を垂れ　石川縣　中松　一恒
御布施だけで蓮のうてなに乗るもり　岡山縣　菅田　直
内職のミシン何時しか頼られて　貝塚市　岸　優
お花見に天気予報が合っていた　倉敷市　角田　卯月
平凡を読むだけ趣味は読書です　大阪府　林　恭治
智慧は無いが金があるので相談し　笠岡市　木山　遠二
けんかあって賑かだったと言う祭　新潟縣　高野　不二
ハンドルを握れば酔うた人ならず　東京都　前山　北海
眼鏡拭きゆっくり妻のぐちを聞く　米子市　湯原　一机
お人好しだから女にもてる性　西大寺市　西山　晴人
倦怠期別れるまでの強かりき　京都市　竹松　九角
公園のこゝもターザンごっこの子　出雲市　佐藤　泰之
よもぎ餅泣いた日がある匂いなり　今治市　越智　義夫
ふるさとの祭はバラにむせかえり　四宮市　徳永　貴美
口紅に人喰人種思い出し　和歌山市　田中　雄峰

およろこび言いに来たのに犬が吠え　笠岡市　木山　次郎
昇給はした給料は遅配なり　鳥取縣　岩佐　誠笑
産声を出すまで医者は振り廻し　山口縣　田中　秋徳
美しいガイドで景色目につかず　岡山縣　吉田　清遊
遅い夫立腹したり案じたり　金澤市　平尾　豊子
病床へ妻の心の花が咲く　守口市　田中　春造
うっかりとやれば恋する意味の花　岡山縣　滑水　秋夫
味かげん一寸見てよと甘えられ　岡山縣　舞島　白郎
お便りが来ない来ないと筆不精　和歌山縣　土井　京子
鶏締めて甘茶汲む手を洗っとき　岡山縣　富池　茂人
愛情を紅茶の中でかきまわし　岡山縣　及川　南洋
まあの付く器量で玉の輿にのり　堺市　横倉漫多朗
服だけを見て旦那とはこそばゆし　堺市　大橋　溪泉
写真とは別な見合の顔が来る　大阪市　清水　和夫
見せつけた欠伸が話幕にさせ　岡山縣　宮田　竹坊
応揚にあいさつ抜きの懐手　大阪市　佐々木十三子
義理の有る母には言えない今朝の夢　大阪市　川口　秋香
親の脛噛って学をひけらかし　堺市　小沢　文糖
かき分けて急ぐ座席はこわれて居　堺市　難波　桜夫
ふるさとで嫁ぎ都会の夢を追う　神戸市　竹内沙智子
花鋏いきのかよった音たてて　大阪市　清水　梅溪
チョボ焼に母も一鍋若返り　堺市　川端　鬼酔
焦土尚残る堺の街の幅　大阪市　丹波　太路
名物に付いてる粉もなめてみる　大阪市　岸本　木魚
公約の軽々しさと皆んな責め　岡山縣　亀井　星浦
内の子を刈って床屋は春になり　大阪市　加藤　晴代

ユーモア横丁

不二田一三夫

◇
姉という名のロボットで病み
つゞけ　（美美子）
—セコハンだっていゝ加減なものです　—自衛隊

◇
子沢山母へ按摩の手が余り　（鈴彦）
—こう不景気じゃ一寸先きが闇じゃワイ　—按摩

◇
買わぬ気のデパート七階まで昇り　（トン坊）
—なあんだミモノか　—キモノ

◇
迷信は信じないだが豆をまき　（恒青）
—それがよろしい　—鳩山首相

◇
絶交をポスト意外な音でうけ　（凡々）
—何も書いてないじゃないかこの葉書
—あれ以来口をきかぬと言ってやったのさ

◇
公約を果す気持は軍備だけ　（綾美）
—そうでもして貰わないと、まさか職よこせデモも出来ないじゃないか　—自衛隊

◇
予備隊でいゝさと就職あきらめる　（美婦適）
—もったいない事を言いなさんな、やがては神となる資格を得たのですゾ　—靖国神社

花を愛する政治

―新刊紹介に代えて―

藤本満年

新代議士の当選祝賀会に招かれて出席したことがある。例によって、テーブルスピーチがはじまり、新代議士礼讃の祝辞が何回となく繰り返えされた。末席にいた私も結局は何か一言祝辞を述べねばならぬ順番がやってきた。私は何の準備もなかったので、つい場違いのおしゃべりをしてしまった。

「近ごろ政治家に対して、国民の不信の声は相当強いようである。それは相ついだ汚職問題などが主たる原因ではあろうが、代議士連中が、寝ても醒めても、選挙のことが念頭から去らず、年中選挙運動を継続し、国政について真剣な勉強もせず、空疎な浪曲的ハッタリ演説に終始しているからである。それというのも、実は選挙区の町や村の人たちが、入替り立替り、陳情と称して上京し、代議士に案内役や接待をさせ、幾日も物見遊山に時を過している。この連中の応接に代議士連中は奔命に疲れている。もしこの連中に対する代議士のサービスが少しでも悪かったならば次の選挙に必らず悪影響を来すことは明かである。代議士たるもの、心にもなきサービスに率先窮行せざるを得ないのである。いつの国会でも、議事堂や議員会館の廊下は、この代議士泣せの陳情組が、ウロ〳〵、ゾロ〳〵、田舎の大小ボスが群列をなして押しかけている。こんな状態では、どんな立派な代議士も、国政と取っ組んで、じっくりと勉強する暇はない。今回当選の新代議士を、立派な政治家になってもらいたいと希望される列席の皆さんは、選挙区のボスたちに、何らかの方法で、アドヴァイスすることのできる立場にある方々ばかりである。将来有為の新代議士を模範的な政治家になってもらうため、物見遊山的陳情組のサービスに貴重な時間を浪費することなく、十分勉強する余力を与えるよう努力すべきではないかと思う。」

と、いう意味の発言をした。その席には、わざ〳〵選挙区から馳せつけた、いわゆる大小ボス連中も混っていたので、甚だ無遠慮な発言として、随分反感を招いたことと思ったが、案外多くの共感を得て、割れるような拍手を浴びただけでなく、会が終ってから、先輩の数氏からも、「よくいってくれた」と感謝の言葉をいただいたので、必らずしも場違いの発言でもなかったかしら、と僅かに自らを慰めるものがあった。

選挙のたびごとに、こんどは立派な議員を送り出したいといいながら、いつも同じような人物が議員になるのは、国民の側に絶対的な責任があるわけで、政治に対する国民の批判力がもっと向上しない限り、政治も良くならなければ、政治家も立派にはならないであろう。

元の赤坂離宮は、いまの国会図書館である。館内の施設からいっても、蔵書の量、質から見ても、わが国最高の図書館である。こんな立派な図書館をもっていて、国会議員のうち、この図書館を利用するものは、ほとんど、数えるほどしかいないそうである。勿体ない話である。しかし、国会議員の不勉強も、全部が全部、議員の罪ばかりではない。議員の周囲にいる人たちが、もっと議員の勉強を助長する態勢をとらない限り、議員の教養を高めることは、仲々むつかしい問題ではないかと思われる。

それにつけても、私はかつて東京都杉並区長だった新居格氏の人柄が非常に懐しく偲ばれるのである。新居氏と私は一面識もなく、故人となった新居氏とは、今後永久に相識る機会はないけれども、最近故人の遺稿が発見されて「区長日記」が出版されたので、私は区長日記という書物を通じて、新居氏の人柄を偲んでいるのである。新居氏が杉並区長だったのは、昭和二十二年から三年にかけての僅か一ヶ年ほどであったが、文人区長または詩人区長といわれただけに、区政の上に氏の教養と文化性が強く反映されていることは、日記の各ページににじみ出ている。もし新居氏のような、知性の高い代議士が十人もいたなら、今の国会も、もっと立派な国会になっているのではないかと思われる。かつて作家の山本有三氏が参議院に議席をもっていたことがある。いまの当用漢字や新かなづかいの実施は山本氏に負うところが多い。けれども、山本氏一人では、参議院も古い政治の型から抜け出ることはなかった。

新居氏は区長であって、国会には何の関係もなかったが、区政という自治体の行政は、少くとも、区長の性格によって、少しは新しい政治のフォムが生れるはずであるが、新居氏の情熱とその努力にもかゝわらず、ついに刀折れ矢尽きた形で、在任僅か一年にして、彼は病気を理由に、区長の椅子に訣別を告げたのであった。それは区議会の反動性と区吏員の保守性が、新居氏の新しい区政を受け容れなかったのである。

区長日記には、新居氏の区長としての苦闘がにじみでている。そして多忙な雑務に追われながら、本を読みたいと希ったり、可愛そうな少女の手紙に、ヒューマニスチックな感激にひたったり、詩人らしく花を愛したり、文化人に共通する感傷が胸を打つ。たとえ、自治体の政治といえども、センチメンタルでは解決出来ぬといわれるかも知れないが、どんな政治でも、人を愛する心が根底でなくてはならない。新居区長の区政が、ヒューマニズムの精神から出発していることは、単なる感傷として笑殺することのできない尊さがあると私には思えるのである。

私はこの区長日記と相前後して、壺井栄さんの「私の花物語」を読んだ。壺井さんは映画で一躍有名になった「廿四の瞳」の原作者で、花物語も、しみ〴〵とした壺井さんの作品らしい落ついた読物だった。区長日記と花物語は何の関係もない二つの新刊書であるが、二人の筆者が、ともに詩人として、花を愛する点で共通しているものを感じた。詩人ならずとも、誰にも花を愛する心のないものはあるまい。政治家といえども、徒らに権力や金力を追及することなく、激動する政治の余暇を削いで静かに瞑想に耽り、瞼に美しい花の姿を偲べば、心も和やかに、国民を愛する政治に思い及ぶかも知れない。

藤村梨花さんを訪ねて

（女流作家訪問記4）

丸尾潮花

お名は泰子さん、お歳は二十八歳、お務めは正雀の薫英学園の高等学校の先生だそうである。

「川柳をお始めになった動機は」

「腎臓で寝ましてね、その永い闘病生活の終る頃、親切に進めて下さる方がありましたので、ぼつ〳〵作って見ては、添削もして頂いて居りました。でもね、個性の強い私には食い足りないものばかしで作句すること自体が嫌になりはじめました時、或る方から初めて「川柳雑誌」を見せて頂いて、何と鋭い川柳もあるものだと本当に驚きました。と同時にこれこそ私が求めていたものであると言う事に気がつきまして、作句する気持を失いかけていました私が俄然川柳熱にとりつかれてしまつたのです。幸い私の在学中、戸田古方先生が国史の担任だったもので早速戸田先生にお願いに参りまして現在のみをつくしへ入れて頂き皆さんと御一処に作句の研究をさせて頂いています。

「そうですか古方さんのお務めになっていられる学校を出られたんですか。」

「えゝ大谷高女の出身ですので私の恩師なんですの」

「園秀作家の方につきまして何か、御意見とか尋ねて置きたいとかと言う様なことは有りませんか？又はその方の作品など……」

「私などが、とても作品をどうこうと申上げる資格もありませんし、ただとてもお上手だといっも感心をさせられています。最近女流作家の方が大変目立って来ましたのですけれど、まだ他の短詩型に競べましては少いのではないでしょうか」

「そうとも云えるでしょうね。でも戦前はもっと少なかったようです。詳しいことは知りませんが」

「どう言う理由でしょうか」

「梨花さんが最初川柳をお創りになる以前川柳とはつまらないものだあんなもの良く創って楽しんでいられるなあと思われたとおっしゃる様に一般は当時の谷脇素文の漫画川柳を大衆雑誌の中で見たり、又はつまらない新聞に発表されたものを御覧になる以外には本当に改革されたいい川柳を見ると言う機会がないためだったのでしょう。以前に蔑乃女史の指導であざみ婦人句会を創設した事がありますが随分と骨が折れました」

「じゃ石川ひさみさんなども、その時分の作家なのでしょうか」

「そうです」

「私ひさみさんの句が好きです。とてもハッキリ言い切っていられるところが、それから長谷川三司さんの作風も好きです。よく子供の句を創っていられますが子煩悩じゃないかと良く思わされます。飯降白香さんは若しか学校にお務めなのでわないでしょうか」

「そうです。先生です」

「当りましたね。句を通しまして、ではないかと思ってました。わかりますね。私の句もわかるでしょうか」

と御心配の御様子。

「梨花さんは先生だとは、わかりませんね」何かしらほっとした様に又話を続けられる。

「豆秋さんの句集を桑露さんに一寸見せて頂きましたが、何か私

不朽洞だより

▽路郎師は五月廿二日開催の川雑倉敷支部川柳大会に出席のため廿一日午前八時四十分の「つくし」で発たれた、同夜は旅館かき増に一泊の予定。▼戸倉普天氏（兵庫県）からの消息に依ると、阪大に勤務の令息仁一郎博士が今回東北大学教授に栄転、四月十七日出発赴任された由、なお、普天氏は教育委員長其他各種団体に関係されて多忙に消光されて居る▼路郎師は堺市河又醤油会社々長元代議士、河盛安之介氏の堺市長当選を祝して色紙を揮毫贈呈された。河盛氏は市会議長時代、戯蝶と号して路郎師に川柳を学ばれた。▼福田山雨楼氏（横浜市）は五月五日頃から容体悪く一時はこのまゝ参ってしまうのではないかと思われるほど呼吸が苦しくなられたそうであるが、絶安の甲斐あって数日後には稍楽になられたとのこと、一日も早く軽快になられるようお祈りする▼小西無鬼氏（兵庫県）から過般の篠山支部川柳大会席上の路郎師の講演を聴いた会員が、翌日早速無鬼居を訪問、川柳に就いての考え方が間違っていた、これで大変よく判ったと非常に喜んで来られたとの、うれしいたよりがあった。なお、四月十六、七、八の三日間、王地山稲荷春季の仮装行列に当って、仮装の準備に深夜まで尽力されたとのこと。▼藤本満年氏（東京都）からの消息に依ると四月十四日東京羽田空港出発、山陰、山陽、四国を巡る観光旅行に出向き、米子空港に着陸。松江、岡山、瀬戸内海の雨に煙る中を眺め、高松に宿泊、「旅の春合羽の干くひまもなく」の句信を寄せられ十七日琴平宮に参拝、同夜一路帰京された。▼若本多久志氏（大阪市）は、光タクシー会社の社長の県議選応援の為め四月十日金沢へ帰郷「魂のぬけた一票かき集め」の句信を寄せられた。なお、久々にて久留美氏宅を訪問、柳談に時を過された由▼尾綠之助氏（出雲市）は過般の市議戦に立候補されたが、大丈夫と云う世話人等の油断から惜敗された▼福島鉄児氏（岡山県）からの消息によると川柳家、在里三芳氏（前弓削町長）が今回岡山県議選に第二位で当選の由。お慶び申上る。なお、鉄児氏は云うまでもなく弓削平氏、富至氏、牛歩氏等の活躍目覚しく、川柳を通しての友情は世人を一驚させたと。▼阿形一杉氏（大阪府）は泉南から府議戦に立候補されたが、力闘の甲斐なく落選された▼木村千容氏（倉敷市）からの消息によると、倉敷支部は入賞、入選率が多く、四月十一日夕刊発表の、山陽川柳にも十秀を三人出した由。なお、同支部の四月例会は柄津遊園地に吟行、盛会だったと。▼美鴨美笑氏（米子市）は五月二十二日に開催される川雑倉敷支部の川柳大会へ小西雄々氏を

には秋の初袷の肌ざわりと言うような感じがして好きな作家のお一人です。」

「変った作家では」

「変った作家と申されますと七面山さんの句は肉体派と言った感じ、でも最近少しお替りになっていられる様に思います。ある一面あゝした句は婦人の方に嫌われる句もあると思いますけれど、私などは、あゝした句があってもいいのでわないかと思います。むしろ面白い方だと考えて見せて頂いています。人間共通の心理と申しますのか一人〳〵の個性や環境は異っていましても人として共通なものが有るのですから。その点未摘花式のものがあってもいいと思ってます」

「川柳をお創りになる様になられましてからの心境などについての変化、つまり物の見方が変って来たと言う様なことは有りませんか」

「其点とても変った様に思います。家族も私がヒステリーを出さなくなりまして父も大変喜んで呉れてますし、物を客観的に見たり考えたりする様になりまして、物事を余り気にしなくなりました。川柳を創る様になりましてから、何でも素直に物をうけとらないとか物をまともに見ないとか言われることも有りますけれど、川柳を創ると物の判断力が養われますから批判的に見たり考えたりする点を言われるのかと思います。けれど、それで一つの句が産まれるのだと思ってます。川柳とはサンドキッチの様なものだと考えてます。外観のパンには何の変りわなくとも中にはさみ込むものによって其の持味が違ってゆく、辛をきかせば鋭い風刺にもなり、ジャムをはさめば甘い句にもなる、そして噛みしめたら噛みしめる程味のあるもの、此れが私の川柳観だと勝手な考え方をしています」と一気に喋りたてゝほっと息をつかれる程、川柳熱をもっていられるのに敬服させられた。

「選者に対するお気付きの点は」

「詰まらないのは当て込みのきく選者ですね。」

「梨花さんと言う名は大変いい柳名ですが、どなたかに付けて貰われたのですか」

「いいえ、私が付けた名なのです。私が病床にいましてとても汚い程に垢じみていましたのでいつも早く白く美しくなりたいと常に願っていたものですから、梨の花のあの真白な美しさが梨花と言う名になりましたの」

「純潔な女性美ですね。で梨花さんはお酒は」

「お酒ねえ……」一寸気まり悪そうにしていられたが思い切って、

「好きです。でもね、病後お酒はあまり呑まない様にしています。おビールは頂いてます。あれでも結構愉快になれるんです」

「頼母しいですね。ではお酒やビールなどをお呑みになって心から楽しいと思われますか」

「えゝそれはとっても楽しい気持になれますし、ちょっぴり男の方の世界が覗ける様な気がします。また家庭も私がお酒を呑むことには反対も致しません」

「これからビールがおいしくなりますね。」

「潮花さんは如何ですか」

「若い頃にはよく呑みましたが今は体もこわしていますし、それにどの宴会でも、お酒の肴にされる方でしてね。そのためにも出来るだけ頂かないことにしてます。良子さんの句にはお酒の句が多い様ですが梨花さんにはまだない様ですね。いずれ其の内傑作を見せて頂きましょう」梨花さんの川柳熱に巻き込まれての柳談はなか〳〵尽きようともしない。時計は二十二時を少し過ぎている。柳談に冷え切ったお茶を一気に呑み干すと又の日を約束して退陣をした。

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識！

1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！

明色アストリンゼン

桃谷順天館

川柳まつりに就て

★川雑の年中行事として多大な人気をよんでいる川雑川柳まつりが本社では七月十日（日）に開催される。就ては川雑各支部並びに川雑系各会は全国一斉にこの吉日（路郎先生誕生日）に賑々敷句会を開催されたい（万一この日が差支える場合はその前後の日）★この日には特別兼題（路郎出題並びに選）が一題課される。課題は各会宛に後報する。この特別課題の第一席入賞者に路郎賞を、その所属支部又は川雑系会へ優勝楯を贈る（楯は翌年の川雑川柳まつりの二週間前に返還すること）★特別課題は一人三句まで、提出句はタテ六寸ヨコ一寸二分の柳箋に一句ずつ読み易い書体で書くこと、その裏面に句主の住所・氏名・雅号及び所属の会名を明記されたい。各会はこれを取纒め七月二十日迄に本社の特別課題係宛に送ること。提出句は当方で更に清記（無記名）して路郎先生に選をお願いする。★右の外に規定はないので、自由にユカイに会を持っていただきたい支部や川雑系の会に所属しない人の入賞は個人賞のみ贈る。柳友の懇親宴などを催すのもいいだろう。本社ではひそかに余興が企画されている。

川柳まつり記念

川柳手拭（路郎揮毫）

一枚七〇円（送料共）で希望者に頒布する。予約締切六月廿日限。一人で数枚申込まれてもよい。なるべく各支部でまとめていただくと好都合です。代金は申込と同時に送付されたい（切手代用可）

同伴出席されるとのこと▼丸尾潮花氏（大阪市）は五月一日、真鍋一飄、清水墨峰両氏同伴で天理市のよろず相談病院句会に出席された▼市場没良子氏宅に電話が架設された天王寺㊇八一三九番▼服部十九平氏（岡山県）は四月十三日N・H・K岡山放送局の「明るい茶の間の時間」に「川柳から見た世相」を放送された。▼伊達赤子氏（大阪市）は堰子と改号された。▼水谷鮎美氏（尼崎市）は多年川雑梅田支部（大阪市）幹事として活躍されたが今回、家事の都合に依り辞任せられ、四月十五日後任として飾間杏花氏を推薦、杏花氏が幹事に就任された。鮎美氏多年の尽力誠に感謝に堪えない。▼西口如川氏（熊本県）が亡くなられた。謹悼。（摩）

新会員紹介

五月

不二田一三夫（大阪市）正葉光氏推薦

岩崎一伸（大阪市）正生々庵氏推薦

一路集

エチケット

菊沢小松園選

エチケット女を連れて草臥れる　牧人
エチケット酔うた振りして無視しこき　水堂
エチケット習うた通りやってのけ　藤波
見ぬ振りをしてポリスにもあるエチケット　十悟
エチケット知る年頃か寝敷して　酔水
エチケット守って今日もバスへ立ち　美能留
かっぎ屋はかっぎ屋同士ゆすり合い　ひでを
物を乞う人の群にもエチケット　多久志
エチケットと別に商魂たくましく　雄声
エチケット知らぬ無邪気が気に入られ　同
集合に少し間があり釋を剃り　蘇堂
冗談がうっかり言えぬエチケット　葉光
お座敷へ出る時だけのエチケット　賀峰
ライバルに会釈で通るエチケット　満佐志
エチケット明治は溜息つくばかり　春也
暗い道に来てエチケット乱れそう　恵二朗
エチケットしびれた足の置きどころ　同
エチケット先ず重役の眼にとまり　代仕男
今更に聞くにも聞けぬエチケット　不二
(佳)エチケット無駄な遠慮をして戻り　良坊
(同)エチケットよし行きづりであろうとも　荘
(同)エチケット守らぬ方が恋に勝ち　立児
(同)何気なくするエチケットに視線来る　勝城寺
(同)エチケット芝生の恋へ道を更え　十九平
(軸)宴果てる頃まで上座空いたまゝ　

エチケット言って居れない子沢山　実信
わきまえて居るに使えぬエチケット　全信
エチケット守って恋がはかどらず　満秋
ヌードにもエチケットあり順にぬぎ　太路
エチケット守りチャンスを皆のがし　貴美
マゴトの子でも知ってるエチケット　善坊
見え張って殊更めいたエチケット　夜潮
エチケット知らぬではないラッシュアワ　繁蔵
エチケット別に野心の髭を剃り　一夜
女性へのエチケットだけ知って居り　秀次
商魂の中にも床しエチケット　荘
さしかけた傘をいとい合い　光郎
ライバルに先手うたれたエチケット　同
エチケット自動扉が締りかけ　有子
香水のほのかに匂うエチケット　同
エチケット忘れるほどの酔こなり　正郎
見て見ない振りが此の場のエチケット　十九平
エチケット幹事が言えば座が白け　同

先輩

小西無鬼選

おそなって乗れはいつも会う先輩　全信
先輩の顔で紹介状を書き　実信
先輩が重役なのに入社難　芳の人
同郷の先輩頼る身の落目　徒子
先輩のお見舞今日も寝たまゝで　弘一郎
肩書が出来て先輩名刺くれ　藤波
先輩を倒して派手な土俵入り　秋香
頼りない先輩勝気な妻を連れ　雄々
生死の岐路先輩の戸を叩き　春日
善人にされて先輩よく動き　初甫
療養所の先輩医者程知って居り　一恒
先輩の手垢のついた参考書(トラー)を借り　木声
先輩が小使で来る就職難　洛酔
それどころではないと先輩にけを打ち　十悟
先輩と云う名で寄附を弾まされ　酔水
先輩の世をすねる気がわかりかけ　ひでを
妹を呉れと先輩本気なり　美能留
先輩をライバルにした職場　左文字
先輩が料亭の二階から招き　雄声
先輩の失恋聞いてるコップ酒　緑風子
先輩を使う立場で気が疲れ　水堂
世話ずきの先輩が居て新世帯　茶堂園
猪口をさすにも先輩と云う構え　蘇堂
いつの間か先輩にされ秀げかゝり　葉光
先輩に安い飲み屋も教えられ　同
先輩に嫌な使いを頼まれる　圭水
割勘にしようと先輩チャッカリし　多久志
先輩は大阪弁で気が弱し　太路
先輩として角帽を見せに寄り　ひか平
停年期まだ先輩も平社員　代仕男
先輩に偉いのがいる良い社運　素飄
先輩にすまない椅子をあてがわれ　古心
失敗の度に先輩の温く　千年
先輩の不幸コーヒーを飲みながら　善坊
後輩を課長に持っていたわられ　神径子
先輩も淋しく来てる安定所　伴ト
先輩はあわて新婦は余裕みせ　貴美
先輩の愚痴で酔がれる縄暖簾　酔子
カンニングした先輩が課長席　夜潮
先輩の顔負けしたと隠し芸　秀水
先輩のところてん押しに停年来　技葉
後輩へ美談残して卒業し　万古
先輩の寄贈のピアノ児等囲み　有子
先輩が植えた桜の下で飲み　同
火の車やと先輩予防線を張り　五茶
先輩に又当直を頼まれる　一恒
先輩の家を税吏として訪ね　満秋
大先輩の一言衆議一決し　牧人
先輩に彼女の前で意見され　一念
先輩がはじけば一度で合ふ伝票　綾美
じっくりと先輩腕を組みなおし　正郎
先輩がかばってくれたミスティク　一策
先輩が村の役場の隅に生き　三林坊
出世してからの先輩振り向かず　晴々
(佳)口程にない先輩の石が死に　トン坊
(同)先輩が無心に来てる社長室　良坊
(同)先輩の親分肌へ金が切れ　白猫児
(同)先輩のメスの捌きにフト見とれ　恵二朗
(同)先輩は過去の母校を云いたがり　ひか平
(同)世話好きの先輩にして金がなし　光郎
(同)ずばぬけた先輩故郷に容れられず　へとち
(同)去年聞かされた通り新入社に教へ　立児
(同)コテコテの帽子先輩からもらい　十悟
(同)先輩が仏に見えた徴税課　保夫
(人)貧乏をするなと先輩淋しい日　雄々
(地)先輩と老眼鏡を較べあい　十九平
(天)先輩が大物すぎて頼りなし　進歩
(軸)卒業をして先輩という自覚　無鬼

皐月の風

若本多久志

春の草代議士などにふまれるな

と云う路郎先生の句を想い浮べ乍ら、宮仕えの悲しさに社長の県議立候補応援のため、久しぶりで郷里の土を踏んだ。

△

金沢には、県議に紅一点、市議に紅三点、共産党の女流歌人も混っていろとりどり、きいろい声の政見発表は市民の耳を朗かにしてくれた。

鶯、カナリヤ、うそ、その嘘にならぬよう、邁進してほしいものである。

歌をよむ女房に油断すべからず

▽

医者の卵が県議の候補に立った、街頭での演説はなかなか巧く喋べる——然し

獨逸まで行つて漸く竹になり

の医者は、やっぱり医者の天職を完うしておればよいのではなかろうか。

△

候補者の演説会場でどのお寺も次から次へとふさがってゆく。一回の借賃は表向き弐百円、裏はいくらか知らないが、兎に角お寺の当り年である。僅かなおさい銭よりもこの方がはるかに採算的だ。

当選を願う弁士のビラが風にふかれ、押すな押すなの人気は阿彌陀如来もそっちのけである。

釋迦如来様も政見きいている

△

県会も市会も定員の一・五倍から二、三倍の立候補数で、皆当選を夢見ている訳だが、果して貧乏くじを引くのは誰と誰だろう。一方は鯛に赤めし、一方は秋刀魚にやけ酒いずれにしても酒屋は繁盛することだ。

左派も右派もないのが難の生一本

勝つも負けるも時の運と、九十余りのガン首がいずれも立派な公約を叫んで、一どきに立ち上ったが、清き一票を汚さず、明るく選ぶ市民の良識は回を重ねる毎に洗練されてチョットやソットでは欺されまい。

時は今、皐月の風がプンプンと匂っている。

一三〇、四、二四一

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃句集

福壽草

本書は川柳の母麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔でこの機を逸したら再び手に入らぬものである。予定数に達し次第メ切りますから即刻申込まれたい。

定價二百五十円
送料 三十円
菊半型・函入

葭乃句集刊行について

川柳界の巨匠麻生路郎師夫人として令名の高い葭乃女史は、現柳壇に於ける巨星であるばかりでなく、閨秀作家の最高峰として、柳壇にゆるぎない地位を、確保して居られるのであります。

女史は、明治四十四年初めて川柳に手を染められ、厳父河盛芦村翁と共に、大阪柳界に伍して其の偉才を認められ、四十有余年作句精進を続けられているのでありますが、謙譲なる女史は容易に、御快諾されなかったのであります。しかしながら襄年、我国川柳界に於ける世紀の聖典である路郎先生の不朽の名著「旅人」が上梓され、その双幅とも云うべき「福寿草」が愈々、葭乃先生の第六十三回の誕辰を記念に、刊行する運びとなったのでありまして洵に御同慶に堪えない次第であります。

女史の作風に至っては、既に定評がありますので、今更喋々を要しないところでありますが、高度の句品と情味溢るるものであることは、常に我等の推奨おかざるところのもので後進の範とするに足る粒揃いの名句であり、不朽の名著たるを信じて疑いません。

何卒、江湖諸兄姉の御協賛をたまわりたく、左記に依り是非此際一本を座右に備えられん事をお薦めいたします。

昭和三十年三月

★出版予定日・昭和三十年五月末日、五〇〇部限定出版
★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です（切手代用可）
麻生葭乃六十三回誕辰記念

発行者 葭乃句集刊行会
委員長 北川春巣

刊行会実行委員 北川春巣（委員長）武部雷林（副委員長）八木麻天人（副委員長）（ABC順）尾綾之助・阿芳方的・阿形一杉・麻生葭里・土井文蝶・横山夏六・福田山鳥棲・古川麻花鹿・藤本鐵年・岡島鉄兒・頭本鶴梅志・橋本綠雨・濱田久米雄・弘津柳鹿・本田惠二朗・平尾太郎志・石川侃治洞・井上鶴三・木村孤浪・川村好郎・黒川紫香・菊澤小松蘭・國弘半休・小西秀東・亀山晴峰・河村日鶴・黄瀬美秋・木村水盆・河日翠川・木村十楊・水谷鮎美・平田一粥・富田不二・三鬼美笑・正木水客・丸尾潮花・水谷竹荘・岡島青丹子・森下愛論・松江梅星・丸山弓削平・水本無蕾・政田大介・長嶺一瓢・中島生々郷・西尾栗・長野井蛙・西いわを・郷谷光郎・中谷仙坊・野村神月・赤田六藤子・堀村丹路・大西八歩・尾崎方正・大森風來子・太田良子・大森鳳句樂・大鶴女甫・大西漢盛・岡田夜潮・須崎百秋・清水白柳子・新川博也・佐野卜占・坂田良坊・佐野白水・戸倉貴天・戸田古方・筑山悠夢想・高畠蒲鉾・宮岡淡舟・友淵貴山・田頃方大・田村藤波・高崎雄鶯・流野比呂史・吉田水車・吉田翁水・山根白星・山田季蒼・安岡珊枝郎

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五の二五
電話住吉（67）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

江戸川柳に現れた女形役者の紋（其の一）

阿達義雄

（序）

江戸川柳に於ては、多くの女形役者の紋章が詠み込まれて居り、江戸風俗、特に女性風俗の考察の上から考へてみると色々の示唆を与へてゐる様に思はれるし、女形役者の紋が何時の間にか其の役柄の紋になって了ってゐるものもある。この様なことは、沼田博士の『紋章学』に於ても全く触れてゐないことであり、第一、日本文学に於て、最も多くの紋章を詠み込んでゐる『柳多留』も沼田博士には全く知られてゐなかった。之は全く惜しいことであった。

町人紋の絢爛さや、紋章の文様化は役者紋に於て之を見ることが出来るし、役者紋や女形役者の紋章が当時の女性の心に如何に喰ひ込み、浸透してゐたかは、江戸川柳に於て極めて明瞭に看取することが出来るのである。

如上の考察をする前に、私は先づ江戸歌舞伎の女形役者の紋章を詠んだ句を分類して、其の各論的考察をし、総論的研究の礎石にしたいと思ってゐる。

尚、紋章の考究に当っては、江戸川柳のみによって推断する危険を避ける為に、出来るだけ、江戸錦絵などをも参照し、歌舞伎史等の先学の研究を利用させて貰った。

引用句の下に括弧内に（六二）或は（一〇七）などと記したのは、それぞ〳〵「柳多留六十二篇」或は「柳多留百七篇」などの略記であり、その他、川柳評万句合からの引用句の下には、その刊行年月や相印等を詳記することにした。

本稿に於ては、まだ未解決の句も若干あるが、之については博雅の士より御示教を賜はらんことを期待するものである。

数号に分載されることゝ思ふので、全貌を示すために目次を記すと、次の様である。

〔江戸川柳に現れた女形役者の紋〕

（一）黒丸に三星と水木辰之助
（二）封じ文紋と八百屋お七
（三）矢車と中村富十郎
（四）結綿紋と瀬川菊之丞
（五）桐紋とグニャ富
（附）分銅と嵐竜蔵
（六）岩井半四郎の紋
（イ）三つ扇と岩井半四郎
（ロ）丁子車と岩井半四郎
（七）四つ紅葉と市川門之助

（一）黒丸に三星と水木辰之助

水木辰之助は元禄の劇壇の花形であり、まだ十六歳の時に、胡蝶に狂ふ猫の曲の所作事で京女を悩殺し、江戸への御目見え狂言では「四季御所桜」で、春姫に扮して槍踊と唐猫の所作を演じて喝采を拍し、江戸の人気を一身にあつめ、宝井其角をして、「煤掃や諸人がまねる槍をどり」「花の夢胡蝶に似たり辰之助」等の発句を詠ましめてゐる。

元禄十三年の「役者姿記評林」の舞台姿や「風流四方屏風」の槍踊の水木辰之助の絵に、黒丸に三星のその紋を見ることが出来る。

○盃洗へ水木の紋に浮いた猪口　（一三六）

盃洗の中に盃を三つ入れると水木辰之助の紋を連想させる様な恰好になる。

（二）封じ文と嵐喜代三郎

――八百屋お七の紋――

天和二年十二月廿八日の大火で焼け出されて、駒込吉祥寺正泉院（実は指ケ谷町の円乗寺とも言はれてゐる。）へ、江戸本郷成願寺門前の八百屋久兵衛が一人娘お七を連れて避難した際お七は其処の寺小姓吉三郎と恋に陥り、家に帰ってからも、恋慕の余り、火事にさへ遭へば、また正泉院に行かれるものと一途に思ひ込み、我家に放火をして、その罪に問はれ、翌年遂に火刑に処せられたといふ巷談は、文学や演劇の好題目となり、幾多の作品となって広く世に知られる様になった。

之に因む川柳紋章句として現はれて来るのは、八百屋お七の封じ文の紋である。然し、この封じ文が八百屋お七のものゝ様に扱はれるに至った源流は歌舞伎芝居であって、歌舞伎に於て、お七の役に扮する者が「丸に封じ文」のついた衣裳をつけて出て好評を拍して以来のことである。

お七の役をする者が「丸に封じ文」の衣裳をつける様になったのは、若女形嵐喜代三郎が江戸に下り、宝永の頃、中村座に於て「けいせい嵐曾我」で、江戸で初めてのお七を演じ、大いに好評を拍したことに端を発してゐる。

柳亭種彦の『還魂紙料』上巻によると、

「宝永五年の春、堺町中村座にて嵐曾我と題する狂言に嵐喜代三郎と云ふ女方阿七の役をつとむ。是阿七がことをかぶきになすのはじめなり。かの喜代三郎が紋丸の内に封じ文なるゆゑ、今において阿

七の狂言に此紋をつくる。宝永五年は阿七が二十七回忌なり云々。」

其の時のお七の衣裳には喜代三郎の替紋たる丸に封じ文を附けて大当りを取ったので、以後は、縁起を祝って、お七の役には必らず丸に封じ文紋を用ひる様になったのだと言はれてゐる。

此のお七の封じ文紋は、既に奥村利信の漆絵に於ても見られ、又、宝暦元年二月、中村座に出した河東節「恋桜反魂香」の初めの文句の中にも

へ春の夜の夢ばかりなる手枕に、かひなく立ちし鰹が秋、三葉四葉に殿造り、その主様の行方をも、聞かん便りの封じ文。かの雁がねも今茲に思ふに実にや恋の闇……。

とあり、之はお七が吉三の絵姿を燃くと、その煙の中に吉三がその姿を現はしてする所作に合はせる曲である。

尚、この河東節の正本絵表紙には。佐野川市松の扮したお七の衣裳に、丸に封じ文紋が書かれてゐる。

○道楽な紋久兵衛は付けて着せ　（八五）

元来、八百屋久兵衛の紋は封じ文でなく、嵐喜代三郎の当り芸に由来することは、前述の通りである。然し、川柳子は、舞台上のお七が封じ文のついた振袖を着てゐるのを見て、

「久兵衛親父、よくも恋文を想はせる様な封じ文の紋のついた振袖を着せたものだ。だから娘が色事をするのだ」

といふ様な意味で、右の句を詠んだので此の封じ文の紋も娘のお七がつけてこそ相応しく意味深長な処がある。もし、之を堅法華のお七の父親がつけたとなれば随分変なものであらう。

○久兵衛が付けりやおかしい結ヒ文　（寛暦十二年梅・3）

○久兵衛が紋は何だか知れぬ也　（拾遺第十八編）

お七の紋が封じ文なることは、芝居によって誰しも知ってゐるものゝ、さて舞台上の、或ひは実際の八百屋久兵衛の紋は如何となると、殆んど覚えてゐる者はない。

○前表は火中と書きし封じ文　（一一八）

紀海音の浄瑠璃『八百屋お七』の中にも、

「我が夫せ呼び戻せ、さなくば寺へ連れて行け。出家落して生きながら、火へ陥っても大事ない。会ひたい見たい行きたいと、形も乱れ気も乱れ、乱れ心のあどなくも、家が焼けたら寺へ行き、又逢ふ事のあらうかと、ふっとついたる出来心云々」

とある程だから、封じ文の中へも、灼熱の情熱をこめて、「主の為なら、たとへ火の中、水の中へでも云々」などと書いたことか、或は、「読後、この文を火の中へ投じて下され。」などと書いたことが、既に火あぶりになる前兆であったといふのであらう。

○封じ文火へくばったで名を残し　（六七）

封じ文紋のお七が火刑になった為に、その名が喧伝されたといふのである。但し、『笑委記』によると、江戸市中を引廻された時のお七の装束は、

「肌には羽二重、白小袖、甲州部内の碧盤縞、浅葱の糸に縫ひたる定紋の三つ柏五つ所に、桃色の裏つけて、一尺五寸の大振袖上に重ね、横幅広き紫帯、二重にきりゝと引廻はし、うしろにて結び止め、襟ぎは少しおしくつろげ、たけなる黒髪島田とかやに結ひあげ、銀覆輪の蒔絵したる瑠璃の櫛にて前髪を押へ、紅粉を以て面をいろどり云々」

とあるから、此の姿のまゝ、天和三年三月廿八日（墓表には廿九日とある。）、鈴ヶ森で火焙りの刑に処せられたのであらう。之で見ると八百屋久兵衛一家の本当の紋は三つ柏であったらしい。

質疑に答える

初心者のために川柳第二教室を設け、句作に関する研究を続けておりますが大変好評なので、更に第二教室を拡げて、川柳に関するいろ〳〵な質問や相談に応ずることにした。担当は清水白柳子氏。

質問は川柳に関する限りどんなことでもよろしいが、一度答えたことは答えない。調査を要する様な問題はお答えが多少遅れることを予め御承知おき願いたい。「質疑に答える」は大阪市天王寺区宰相山町一四七清水白柳子氏宛

大阪　名古屋　伊勢を結ぶ…　座席指定・ノンストップ

近鉄特急更に増発！

大阪—名古屋 2時間55分　大阪—宇治山田 2時間　名古屋—宇治山田 1時間42分

本社　大阪市天王寺区上本町6

大阪上六発	7.40	8.40	11.40	13.40	15.40	17.40	19.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00	14.00	16.00	18.00	20.00

近畿日本鉄道

川柳第二教室

人生批判社会批判（研究題「口紅」）

戸田古方

私だって口紅をつけたことがあるんですよ。まだ十にならぬ頃、本願寺のお雅児さんというものに出た時のことです。勿論、歌麿の浮世絵に出てくるようなあるやなしやのおちよぼ口というあれです。口を小さくすると可愛らしく見え、反対に今日のように口紅で大きく口をかくと力と強さをあらわします。女権と口紅などにふれてもみたくなります。

〃こゝに口あるぞと口紅派手にぬり〃　五茶

はまつ正面からぴたりとせまって来ます。

〃口紅を拭へば倍の口になり〃　北柳

今日の口紅ならたいがいの口は無理なくかくせるでしょう。がひょっとしたら昔のおちよぼ口を詠まれたのかもしれません。

口紅をぬる句があり、ぬらぬ句があり、ついた句があり、つけた句があり、仲々賑かです。

〃念入りのルージュを歯科の門でふき〃　春也

よ程つゝましい女性なんでしょう、好感のもてる女性であり、句でもあります。

〃口紅もつけぬ女医の顔の艶〃　雪山

女医さんともなれば一人前、制服の看護婦さんとは一寸感じがちがいます。看護学院の実習生などならこの顔の艶もそれらしいのですが、だから

〃休日の看護婦ルージュ濃くつけて〃　柳叟

女の園から解放される日もあるというものです。

〃療養者の恋口紅もうすくぬり〃　笑雷

胸を病んでいる女性、しかも恋をしているときでは、時に薄化粧もさこそと思われます。この句の「療養者」は「療養所」と場所にした方が味が出ます。人物は「口紅もうすくぬり」で充分出ているのですから。

〃病む妻も口紅わずかぬって居り〃　一太

恋の口紅よりもっと所帯じみていますが、仕事から疲れて帰ってくる夫、しかも自分はずっとねたきりで、不自由ばかりさせている。今日は熱も低いようだせめて紅白粉もといういじらしさがにじみ出ています。

〃口紅も薄く学校参観日〃　登

きら星とまではゆかなくとも、着物の色を考えたり、とにかく子供に肩身のせまい思いをさせまいとする母の心づかい、「薄く」の三音に光るものを感じます。

あゝそれなのに

〃女学生逢引だけの紅をつけ〃　比呂坊

とは何とバチあたりなアプレたちでしょう。

〃口紅を忘れかねてる市場籠〃　保夫

インテリ部落に住んでみて、インテリの心理が、女性心理がなるほどうなづけます。

〃うれしき日鏡に口紅少し濃し〃　梅溪

そろ〳〵口紅が濃くなってもよさそうです。この句をうつす時、またしても「うれしき日」のあとへすぐ「口紅」とかいてしまいました。その方が自然なのかもしれません。「鏡に」はコツンとぶつかるのですが、さりとて鏡をどこにもっていったらいゝのかしら、理窟っぽくいえば、自分の口の口紅

篠山城址の濠の桜の花見客の賑わい（一の夫婦が踏み潰す前へ場々会大らがなし喫煙

川雑篠山支部が川柳普及のため路郎師や葭乃先生をお迎えして大会を開くという案件を支部で決議したのが昭和三十九年の師走句会の時であった。以来支部員はそれ〴〵の構想を持ち寄って打合せすること十数回に及んだ。月日は早くも流れて四月十日の大会も、もう旬日を出ないと云う時のひか平、喜天、無聖、枝葉、秀水、其の他熱心な会員の努力は大変なものであった。遂に私たちが待ちに待った十日の朝が来た。篠山口駅頭に無鬼、尋四、左文字で先生御夫妻や不朽洞会理事長の春巣、副理事長の香林、栞の諸先生の外淡舟、愛論、雄声、一の字の各俊秀をお迎えした時は全く感激の涙がにじみ出た。

会場の孔雀会館に落ちついていただく迄にランマンの桜花を満喫して頂こうと旧城跡から濠端や小学校や町内の桜を案内、河原町の三笠鮓で昼食の後会場に到着、時に一時を過ぎること十五分、会場には当日の司会者小畠無聖、酒井ひか平が総師となって準備が全くととのうていた。参会者は隣郡氷上郡から戸倉普天先生を初め森田一路其の他多数、郡内は遠く福住からも六、七名の新会員の出席もあり、電々公社、地方事務所からも会員総出席の賑かさ、殊に女性の会員十数人の参加は他支部でも一寸見られない風景と思われる。只家沢芽花の姿が見えなかったのは淋しかった。

当日の出席者は

催主部支山篠雑川

会大柳川山篠

小西無鬼記

紅は「鏡」なしにはみえないのですから、強調するとすればやめることも出来ませんし。

〃口紅をぬればときめく春の宵〃　一太

いよ〳〵口紅の牙城にせまります。

〃口紅にキッスする気も起きる桜花〃　豊年

桜とはしたいが、桜花とかいて「はな」のルビはどうでしょう。「花の下」とでもいえばまさか藤ともみえますまいが。

〃夜の職場なればもっとも紅も濃く〃　登

この「もっとも」は「最上級」か、たゞしは「勿論」か一寸迷わされます。どっちの意味もふくめてこのまゝにしておいても悪くありません、工夫がつけば工夫してみるのも勉強でしょう。

〃火の様な口の悪女の媚に逢う〃　箔川

同じく

〃夜の美女火を吐く様な口をして〃　箔川

前の句のいきなり「火の様な」と飛出している強烈さは、悪女の「悪」にもよくひゞき、「媚に逢う」という説明も見立てません。「媚」という字の眼から来る感じもぴったりきます。

ミキッスした唇口紅でかくしとき〃　雄声

唇にキッスのあとまで見つけたとは観察がゆきとゞいています。

「カーブした柏子につけってしまったの、まっ白いワイシャツだったわ」

ほんとうですね

〃満員車誰につけたか紅がはげ〃　春也

〃口紅がついてるサロンのくずタバコ〃　幸

くずタバコでは二た目とみられますまい、むしろ惨忍な感じがします。

〃口紅の付いた盃いたゞきぬ〃　狂二

「いたゞきぬ」はよかったですね。女王へ精虫をさゝげる蛸のようです。

〃朝がえり口紅鼻が孫を抱く〃　素泉

いゝ年をして鼻っ柱に紅をつけたまゝ大道を闊歩していたかと思うとまさに人生のエレジーです。しかし「口紅鼻」がわかるまでには大分考えさゝれました。

何とか口紅のつかぬ工夫はないものでしょうか、外国製でも駄目だそうですし、ぬってはふきぬってはふきしてぬりこめたらちっとはよしとかきいていますが。それにしても化粧品のケースのまばゆいこと

〃口紅の容器（いれもの）だとは気がつかず〃　正斗

ピアスカラーの広告は悩殺という手があると教えてくれました。

〃口紅を付ける娘へ考えとき〃　比呂坊

少年防犯係や学校のデーンさんならずとも大に考える必要があります。

衆愚の一人は

〃悪政を知らず必死のルージュ引く〃　修

でしょうし

〃ルージュといえばどこか悪〃　凡九郎

の批判も出て来ます。

今月は軽く課題の扱い方を通して面白く人生や社会を見せていたゞきました。雑吟方は取上げる程の句がありませんでした。

御精進を祈ります。

研究題「定期」及雑吟

〆切　六月十五日

発表　八月号予定

投句先　豊中市本町三丁目二〇一　戸田古方宛

――趣味の川柳浴衣――

路郎生

冬の丹前と夏の浴衣は日本人向きである。もう一つ切り詰めると川柳人向きだと云えよう。ユッタリとしていて庶民的である。その点で私は丹前と浴衣が好きである。その昔講談社から、女優の森律子好みと云う浴衣をもらったことがある。小著「古川柳の味」の巻頭の写真は、その律子好みを着た私である。

昨年の夏、阿波踊を見に出かけた時にも、乗船するとすぐ浴衣に着替えた。船の中でズボンをつけてるのは、何んとなく野暮くさいものだ。浴衣になるとビールの味がウンと違う。

今年も阿波踊へ出かけたいが、今年は揃いの浴衣でノシ歩いて来たいと思う（ホントは踊るつもりだが）それで今度私の句をうまくならべて川柳浴衣を作って見た。

ナカ〳〵素敵だ。出来ぬうちからゼヒどうぞと申込まれた位だ。銀ブラにも道ブラにも向く、男女共通のものである。「川柳まつり」や「阿波踊」に使いたいと思うのでそう沢山はないが希望者には頒つことにした。（一枚八百五十円、送費六十円）送金は社の振替を利用してもらいたい。着金順にお送りする。

路郎、葭乃、春巣、香林、栞、淡舟、愛論、雄声、普天、一の宇、尋四、ひか平、無聖、喜天、汲流、基男、白猫児、秋峯、枝葉、良一、越山、凡志、一路、昌代、雀子、小菊、初穂、拳坊、一凡、善治、正、義雄、喜蔵、吉野、洋牛、伊知朗、功、賀来、梅枝、左文字、岩夫、美津子、鈴江、文子、ことゑ、民子、敦子、良子、菊一、ふじ子、無鬼の五二名外に投句一六名。斯くて席題〆切後路郎先生の川柳に就てのうんちくを傾けた講演には参会の一同も恍惚として、川柳のよさに、しばしは無我の境にあった。講演が終った時、ホッと我にかえり夢から醒めた心地だった。

次々と席題兼題の披講があり、賞品が配ばられる度に嵐の拍手、全く大会のクライマックスだった。全部終了したのが四時三十分、大盛会裡に散会、五時から懇親宴の第二会場に向った。

兼題「保証」　路郎選

（人）悪友があっさり保証して呉れる　冨士子

（地）呑まぬなら保証はすると切り出され　汲流

（天）同情をしたら保証を頼まれた　無鬼

（軸）保証した方の背広が古かった　路郎

（句報は次號各地柳壇に發表―編集局）

いのちある句を創れ

天地抄

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社四月句会（大阪市）

四月九日　午後六時　於　光明寺

下寺町の名もふさわしき、こゝ光明寺はあたりに寺の立並ぶ為に、流石に大阪と思えぬ静寂さである。早くから句筵に取組まんとする人々、一日の労苦を句会の雰意気に浸らんとする人々で、定刻より早く参集する状況であった。開会に続いての路郎師の柳話は、碁の修養と川柳作句の修養とを比べ、習う事は、つまり悟る事である。没になった句についてよく考え、各人も銘々に熟考して、自選し、自信のある句を出すべきである。又辞書に親しみ語彙を豊富にすべきであると述べ、川柳の寺に来て、川柳の説教などとユーモラスをまじえられ要は後世に遺す句を作句すべきだと説かれた。後席、兼題の披講に入り、本日の不朽洞賞優勝カップは大前伝一氏が獲得した。閉会午後九時　（摩）

出席者＝路郎・紫香・いさむ・喜好・一朗・葉乙女・清花・雅堂・辰始・黒天子好郎・水茶・山茶花・博也・葉光・望峯一瓢・潮花・十悟・堰子・文夫・一三夫牧人・里奴・凡九郎・省三・文秋・静馬多久志・伝一・賀峰・水堂・与呂志・茶仏・鬼酔・句浪人・白水・香林・六龍子摩天郎・花村・竹二郎・夢人・全信・淡舟・春巣・白柳子・三司・正斗・梨花・喜仙・雄声・恒明・貴山・栞・東洋男・義英・葭乃

兼題「養　生」　麻生路郎選

空気までこんなにうまい出養生　牧人
養生をせよと云いつゝこき使い　賀峯
帰れない島だ養生瞳を閉じる　十悟
呑んでいて先生酒はどうですか　しげお
養生に隣の音痴邪魔になり　喜好
酒止めるだけの養生さえ出来ず　賀峯
金も呉れずに養生なさりませ　一瓢
養生に帰れば故郷火の車　白水
養生へクイズの賞が届けられ　淡舟
養生の甲斐此頃は杖をつき　博也
養生が海か山かでもめている　貴山
養生へ母のたよりのあたゝかさ　葉乙女
不治だとは云えず養生すゝめこき　多久志
微熱まだ去らず養生念押され　いさむ
養生のあきらめきった温泉にひたり　望峯
養生のゼイタクテレビがほしいとさ　恒明
なまくらのように養生見てられ　十悟
養生をさせない電話またかゝり　紫香
養生へ故郷の水美しき　阿茶
養生法守って鶴の様にやせ　恒明
養生がてらの百姓も板につき　堰子
気長うに養生しいやとほっとかれ　葉乙女
養生へ気長になって土いじり　三司
養生相叶わず黒枠とはなりぬ　水堂
養生を充分せよと云うて鍼　堰子
出養生毒になるのを連れて発ち　潮花
人を焼く煙を見てる出養生　三司
養生に来た温泉で派手にやり　茶仏
海の青山の緑で良くならず　水茶
養生の一ぱい医者も賛成し　香林
子沢山養生などと云うとれず　雅堂
養生を健保が心強うする　日満
養生をせよと我子に叱られる　しげお
養生に来た青年に本を借り　白柳子
用足した後で養生せよと言い　伝一
養生と別にこどもはこさえてる　路郎
あの色気あれで養生してるのか　路郎

兼題「義　理」　北川春巣選

義理と言う字が私には金に見え　全信
義理かいで面白いほど良く書り　十悟
義理少しかけば恐妻家と言われ　山茶花
義理立ての草子上げ底で一と並び　一瓢
義理知らぬ男の派手な暮し向き　水堂
義理固くラッシュアワーに押し返し　花村
義理買いの文楽の切符もてあまし　阿茶
勝手口小さな義理を包んで来　三司
舞妓もう義理という字を国へ書き　一三夫
義理果す足袋のこはぜがちきっし　紫香
不義理して都会の隅で細う生き　雅堂
義理欠いて給料高い方に行き　雄声
住みにくい浮世を義理がまた狭め　凡九郎
義理果す道で蛙が鳴き止まず　紫香
義理人情庚申塚は宵の雨　三司
義理三分意地が七分の寄附の高　好郎
チップだけついで仲居膳をかえ　望峯
気象台への義理か天候回復し　正斗
義理固い人が無口で不気味なり　季賛
義理の子が泣いて近所に気を使い　喜好
派手に着て義理の親娘と云う若さ　潮花
新聞の隅でお義理に取り消され　省三
部屋見舞名取りの義理が届けられ　潮花
五男二女申訳なし義理を欠き　六龍子
義理だけの顔は後で煙草喫い　与呂志
利息だけ払うて義理を立てゝおき　多久志
香奠に一口はいる小さい義理　淡舟
阿呆らしい義理を男は立てたがり　水堂
甲子園義理もないのに声からし　一三夫
義理で来た見合意外ないゝ娘　山茶花
包紙替えて値上げの義理をたて　正斗

兼題「青　空」　冨岡淡舟選

青空の中で一匹釣り上げる　紫香
青空の村遠足の列つゞく　季賛
一泊の旅青空につゝがなく　いさむ
失業の身の青空がうらめしい　春巣
会いに行く三面鏡へ青い空　省三
青空も見ずに算盤弾くだけ　茶仏
青空へ吾子の重みを抱き上げる　六龍子
失職を嘲笑うような青い空　与呂志
溜息をつく大空は晴れ渡り　雄声
青空へ嘘をついた悔が出る　栞
青空がきれいに映る山の池　賀峯
青空へ若き日の恋追うている　文夫
青空の下でニキビが目立ち過ぎ　春巣
青空へ冨士は無慾のいゝ姿　水堂
青空へ続く郷愁つのるなり　文夫
青空へ抱いて抱いてとねだられる　しげお
二人目の子が欲しくなる空の青　句浪人
青空になった頃には花はなく　全信
舞鶴へ一歩青空高く晴れ　東洋男
雲一つない青空も淋しけれ　葉光
許された試歩へ青空すみ渡り　好郎
青空の青さが癇な斗病記　博也
青空の真下で香具師の嘘を聞き　春巣
欠伸捨てに立てば目にしお青い空　山茶花

青空へ馬券の端が舞い上り　賀峯
天気予報外れてうれし青い空　静馬
連休が済めば澄み切る青い空　凡九郎
ニコヨンの話も弾む青い空　静馬
青空を窓越しに見て粥を待ち　日満
青空へ昨日と別な思い事　摩天郎
青空の下で些細な慾もつれ　水堂
寝転んで見る青空の夢があり　雅堂
青空へ恋の手足を延ばしたり　黒天子
青空を褒めて露店は荷をひらげ　いさむ
青空が見えてまっせと寿司を巻き　省三

兼題「畳」　西森花村選

家賃だけ上げて畳は替えに来ず　省三
道場のような畳の子沢山　しげお
長椅子へ畳の様に坐る母　山茶花
畳蹴たてし老の痛々し　梨花
二階貸す話決って畳替え　一の字
破れ畳簞笥の下へ敷きかえる　好郎
石油コンロ畳へぢかの二階借　白柳子
虫居れへんかと畳の真ん中へ坐り　同
畳へりふまぬ作法にくたびれる　恒明
退院の畳楽しい我家なり　季賛
老眼をかけて畳の針見つけ　一朗
仮事務所畳へ椅子のあとがつき　牧人
古畳生きねばならぬ嘘もきゝ　梨花
叱られているらし畳にらまれる　凡九郎
畳上げた痕跡刑事見逃さず　白水
破れ畳往診に来てつまずきぬ　白柳子
新築の畳へ大工の足袋の穴　与呂志
シベリアの涙が落ちる青畳　雅堂
畳の目数えとう〳〵借って去に　香林
百畳敷まだ寄附金を集める気　貴山
手をついて畳へ嘘の滔々と　梨花
足袋ぬいでわが家の畳花疲れ　花村

席題「仁王」　清水白柳子選

仁王さんトンボのつがい見て居たり　博也
雪洞が出て仁王さん歩きたく　香林
仁王さんの話で孫が手古ずらせ　黒天子
仁王さんは知らぬ四月の鐘の音　一瓢
仁王さんたまにはストもして見たく　水堂
此処からは拝観料の要る仁王　牧人
口程もある仁王さんの臍　水堂
仁王さんにどなられそうな待呆け　山茶花
仁王さん国宝ですに振り返り　堰子
お上りの眼さ仁王さんの眼が出合い　潮花
仁王さんアブレゲールに無視されて　白水
仁王門まだ石段がつゞくなり　紫香
参道を真っ直ぐに見て仁王立つ　同
写真機へ何時も仁王はポーズをし　花村
ジープ乗りつけて仁王だけ撮っていに　春巣
国宝指定も嬉しなさそな仁王さん　恒明
仁王さん私許りをにらんで居　喜仙
鼻紙を知らず仁王はいい気なり　一三夫
金網の奥に仁王の眼がまともに　茶仏
仁王さんのわらじへ毒気抜かれたり　香林
気の毒な旅芸人を仁王も見　文夫
落日を仁王の臍が受け留める　葉光
夕焼へ仁王はカット眼をひらき　博也
しがんだに仁王の臍が覗かれる　葉光
お母ちゃん仁王は風邪をひかないの　伝一
仁王門くゞると鳩も顔馴染　鬼酔
仁王さんうっかりチボを通らせる　望峰
仁王さん誰も拝んでくれぬなり　文秋
埃りっぽい酒の匂いを仁王嗅ぐ　白柳子

席題「乗気」　川村好郎選

命かけてなぞと女は乗気なり　潮花
持ってないのはかり乗気になってくれ　牧人
社長先ず乗気で迎える使節団　一瓢
乗気らし電話の声もはずんでい　葉乙女
こゝらから乗気になったよい話　水茶
親の方が乗気になった持参金　雅堂
良縁へ乗気にならぬ秘めた恋　同
一応は乗気でないと見せて置き　堰子
乗気とは別にデフレの話が出　山茶花
商魂は乗気の眼見逃さず　一三夫
乗気にも成れぬ話を派手に聞き　与呂志
乗気でない話畳の目を数え　正斗
かつぐのと違うかなさ乗気なり　白柳子
一升空く頃から乗気になり始め　堰子
重役の乗気銀行で借れる人　貴山
山かけた話へかゝって来た乗気　十悟
親も乗気仲人月給云いそびれ　好郎

席題「ポマード」　丸尾潮花選

ポマードは別散髪の値段表　十悟
ポマードに悩まされてる満員車　雅堂
ポマードを又叱られて居る枕　十悟
ポマードの賞品禿げたのがもらい　喜好
ポマードぐらいつけておしゃれの娘に言われ　文夫
べた〳〵につけて白髪をごまかす気　賀峯
ポマードをつけても上向くのはしかけ　花村
かつら被ったようにポマードつけて居り　静馬
待ち合せらしいポマードよく光り　香林
裾だけの毛にもポマード矢張り要り　水堂
たまに借るポマード伴出し渋り　堰子
薄給のポマード高い方をとり　雄声
ポマードをつけて浮気の髪を分け　水堂
ポマードが鼻くそ程ですむ頭　望峯
ポマードですだれのように毛を並べ　文秋
ポマードがまだ少し要る毛が残り　博也
ポマードの匂い車窓は春の風　潮花

席題「売店」　新川博也選

売店へ来て賑やかな子沢山　紫香
売店で舞妓油を売って居る　花村
売店へ舞台化粧のまゝで来る　潮花
売店へまた走らされて居る幹事　恒明
閉店の間際化粧の手で包み　黒天子
延長戦売店少し暇になり　紫香
売店の電話を借りる急な用　淡舟
千円札を出せば売店釣がなし　同
売店に傘を預けた雨上り　雄声
売店に停年と云う顔で坐し　香林
売店の娘もあわてゝる発車ベル　潮花
売店を探す手ぶらの腹が鳴り　雅堂
売店はもう逢引の場所となり　賀峯
売店でも出す気で二号貯めている　省三
売店の前でぽかんと田舎の娘　淡舟
泣き止まぬ子へ売店は如才なく　恒明
売店で次の発車を聞き合せ　雄声
売店へ追加して酔う花の下　牧人
売店のミルクが美味い旅の朝　一朗
売店で二円のマッチ買う気兼ね　白柳子
売店を一番先きに子が見附け　喜好
売店はラッシュを過ぎた水を撒き　春巣
売店へチョイ〳〵借りる顔がき　多久志
売店を地図に大きくかいて置き　賀峯
売店に慌て者だと見てとられ　春巣
売店で買いたす旅のウキスキー　三司
売店を過ぎたら背の子をおろし　一三夫
売店で幹事残金読みなおし　花村
売店はぼろいするめが売れ残り　一三夫
愛想ない売店やけど通りみち　博也

川雑　淀川支部句会（大阪市）

四月六日　於　香林居　武部香林報

花便り月給までは程遠し　耕六

桜だけ高く差しあげ満員車　全信
手が届きそうな桜の注意札　東洋男
春はもう仕舞いと桜衣替え　菁菜
下戸一人桜の下ですしを喰い　東洋男
弗の客招く桜のパンフレット　水堂
桜音頭唄うたまでは覚えて居　多久志
桜あわれこんな風にも散ってゆき　花村
政治家に欲しい桜の散っぷり　水堂
はぐれたらはぐれたでよし夕桜　花村
花吹雪ページ繰る手をしばし止め　香林
午前午後借金取が二度も来る　尚徳
気がついた頃には人生すでに午後　花村
アベックがベンチを占めるひる下り　柳詩
行楽の人もむざんに午後の雨　礼司
退庁時の雨へ予報をチト恨み　発中
支払のいゝお得意は午後廻り　水堂
風からの予報次第で組むプラン　六竜子
夕めしはよばれる積り午後から来　朝風
午後からはプラスアルファを賦る決議　保夫
浪花節へその力が聞きどころ　柳詩
表札は自筆新居に春が来る　香林

雑川　**池田支部句会**（大阪市）

三月二十二日　於　阪急電鉄本社
菊田いさむ報

泣かないよ僕は今日から一年生　幸
更年期歯ぐきを出してよく笑い　ゆずる
更年期過ぎた仲居のよく喋り　いさむ
更年期だん〳〵嫁がにくらなり　紫香
道ならぬ恋意識する紅が濃し　杏花
土堤の恋ボートの恋を見てるなり　紫香
十代の恋はよく喰べよく喋り　水堂
罐切りへ二人つきりの恋の山　水客
ベテランに揉まれた甲斐の今日の地位　水堂
ベテランも恋の傷手のあった過去　凡九郎
ベテランはただ黙々とうぬぼれる　いさむ
ベテランが揃い意見がまとまらず　ゆずる
ベテランにされて一言喋べらされ　黙平
見殺にするかと金を借りに来る　三司
見殺にされる菓子折置いて去る　紫香
鳩時計見殺にした夜が更け　水客
見殺しの心を今にしてわかり　凡九郎

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）

三月十七日　於　西光寺
須崎豆秋報

カムバック昔のスター猫に化け　葉光
アドバルンやっぱり金の要る字なり　十悟
印象に残らぬ顔が声をかけ　賀峯
銀盃のフラッシュまさもにあびせられ　恒明
持って来た地図も焼跡間に合わず　小松園
我が家の変化を母はくやしがり　春洋
電車また潮のような人を吐き　凡九郎
潮の色どうのこうのと鰯網　雄声
銀盃の前でネクタイ結んでい　豆秋
喉が鳴るだろうと酒のアドバルン　文秋
潮待ちの宿で大漁の話聞く　太路
潮時を見て仲裁買って出る　喜仙
潮時を見てから漁師船を出し　秋香
ジグザグに歩み我が業まだ成らず　太路
鰻採りしてゝも白い飯になり　梅志
業物と云うだけ切った事はなし　小松園
阿呆にもならねばならず生きる業　豆秋
テレビ一ぱい力道山の業が飛び　樹峰
昔取った杵柄と云う業を見せ　春巣

雑川　**下関支部句会**（下関市）

米三翁喜寿祝賀句会　石川侃流洞報

四月十日　於　福王寺
祝辞今内助の妻のことにふれ　吾郎
感激の握手は左手も添える　同
投票日迄はもてゝる有権者　秀郎
敗戦に老樹切株だけ残し　同
公約にもうだまされぬ有権者　十字星
有権者もう跡台はこり〳〵し　伊三男
父兄席はあくび祝辞はまだ続き　若葉
大銀杏善男善女に仰がれる　同
一票を親戚知己が攻めたてる　木陽子
地下足袋でエプロンで背広で投票所　戊理智
一桁の数を変えたは俺の票　良太
それとなく名刺候補の名でおかれ　司楼
老樹から四方八方みな青田　かうたる
花道のライトへ派手な立役者　天声
金力にびくともしない有権者　良坊
美辞麗句なか〳〵祝辞すまんなり　半休
模範村リヤカーで来る有権者　蘇人
頼まれた票へ気軽く受け流し　土筆坊
ミーハーチャン年が与えた有権者　雲水
庶務課から廻った祝辞で読み違え　侃流洞
立役者の欠席会が引き立たず　同
父と子の意見が違った投票日　柳慶
花見のレコード福王寺へ流れ込み　同
左利き娘盛りへ暗い影　一規
のんびりとしたい花見へ候補立ち　藤四郎
落葉掃く尼僧忙しさ愚痴にせず　同
立役者煙たがられているを知り　同
観光バス若葉の中を縫う速さ　同
聞いておく程度で帰る有権者　九呂平
有権者としての私へ名士来る　日出男
此の一票迷って捨てた有権者　柳鯉
苦労人らしい祝詞は叔父がする　ほなみ
老樹一本西と東の村にする　同
孫の脊を借りて一票入れに行き　豊
左利きも承知見合の座にすわる　里子

雑川　**備前支部句会**（岡山県）

三月十九日　於吉永町役場
気まぐれの足が止った縄のれん　柳風子
気まぐれの馴れぬ手付きの茶碗酒　大沢
伊達でなく気まぐれでなし白髪染　清風
人気者の妻で夫は放っとかれ　みや子
人気者少しはつらい金もいり　東岸子
鉢巻を結び直したたき売り　静風
たたき売り買う気はないが面白い　みどり
たたき売りサクラが買っただけで散り　駄流児
たたき売り負けた所で一つ売れ　柳穂
たたき売りされるバナナが舟で着き　伊久野
一人だけ新柄でないつつましさ　娯句楽
知らぬ間に稲が延びてる親がかり　久米雄
たたき売り財布の中と相談し　幸山

雑川 京都支部句会（京都市）

四月十六日夕　於 仲源寺　田中鳥雀報

春の風土橋の穴を抜けて散る　晴芽
就職がきまり仮縫うれしそう　親生
左まえ知らず同志社受験する　みのる
仮縫にさゝれはせぬかと思うピン　鳥雀
カーテンの中仮縫の春の肌　甫三
仮縫の若さを腰のあたりに見　司郎
同志社に入学しけり御曹子　ゆきら

雑川 堺支部句会（堺市）

四月十九日　於 摩天郎居　八木摩天郎報

古本がまだ〳〵廻る裏長屋　雪山
たこ焼のたこの姿が見当らず　雄声
いぼ一つ入れて蛸焼とは哀れ　十悟
狸寝が足袋拭くすそへ唾をのみ　好郎
雪やこんこん子供の素足つゞく朝　摩天郎
同罪とかばう兄貴の眷を拝み　一楽
同罪になぐり返しただけの得　貴山
同罪の女の方が年は上　葉光
岡惚れはしたが手出しはあんただす　好郎
エキストラ袴が邪魔で走られず　圭水
七五三袴が駄々をこねて居り　比呂志
お稽古がすんで素足へ風を入れ　貴山
売物の素足に女優保険かけ　冗歩
同罪はそら殺生や初心な僕　武助
新人のくせにダブルの服を着て　素男

雑川 篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼報

前編は笑いラストでよく泣かし　凡志
ひねりちゃんまねて見たのに鐘一つ　雀子
叩く真似するにも女艶づぽく　無聖
叱られた通りの真似をやって見せ　ひか平
丘こえて通るおやじのほおかぶり　伊知郎
故郷はなつかしき丘を馬車で越え　勝二
美しい恋なり町の見ゆる丘　左文字

雑川 宇部支部句会（宇部市）

四月十七日　於 岐波浦　国弘半休報

頂上へ来て足元の花を褒め　半休
山上で大きく大気胸にすい　万盛
火の山の松は岩目を裂いて生き　丸平
なんと云う川か知らぬが水にごり　望月坊
大雨を呑んで威勢のいゝ流れ　成理智
川幅も三倍にして雨あがり　雪達摩
貝を掘る人影もない続き雨　呆鴨
一億のはけぐち海をうめたてる　四夢
頬まれを軽くながした投票日　峰松

雑川 大聖寺支部句会（石川県）

四月九日　於 光郎居　野村味平報

同伴でてれて恩師に紹介し　武富
人のないことわアベック手をつなぎ　桃園
同伴は昨日と違う秘書を連れ　よし
アベックの客へ囃場は舌を出し　光郎
還暦と云うのに長男ランドセル　一恒
注射が効いたは明方迄のもの　味平
子沢山愚痴か自慢かくしゃべり　久雄
パトロンの留守をマダムの費いぐせ　菁也
お気の毒ねえとマダムの人情味　実穂
それからのことはマダムにまかせとき　秀魁
常連にマダム経営難を言い　飴ン坊
半分はマダムが飲んだっけを出し　千古
酔うてゝもマダムの勘定確かなり　春也
マダムもう恋は卒業したつもり　方大
火のような恋の前科を持つマダム　天風
パトロンを変えてマダムは又太り　五茶
魅力ある肌が現像液に浮き　呑張
デフレ風春の魅力へ振り向かず　一平
溢れ出る客へバス嬢気が尖り　春日
花の山溢れてヒステリックなマイク　桂月
バケツ今水が溢れる立話　斜木
魅力あるエクボに負けてピースにし　谷水
美人薄命保険屋うまい事すすめ　一善
美しい嘘で罪な嘘をつき　加志子
新柄へ瞳わざ〳〵よけて過ぎ　越鳥
混雑に巻かれぬように旗を挙げ　万古
混雑の宿屋新婚慌てさせ　広志
混雑をアベックさけてさけて行き　素身郎
混雑を予期した店に雨が降り　風の子
肩車して混雑の中を抜け　空頭
混雑につい恋人の手をはなし　弼次郎
出勤のパパにゲンマンしてせがみ　笑雷
約束の日をりゆうとした風で来る　麗水
約束の禁酒が憎い花日和　泥魚
甘すぎる話に乗って約手かき　千容
約束へ云い訳出来る雨が降り　峰豊
追って出てまでも約束念を押し　鯉風
迷い子に桜チラ〳〵散りかかり　一念
落花狼藉果はポリスの世話になり　可笑
花びらも一しょに呑めと猪口に散り　千代春
花びらを箸にかけるのも惜しい　卯月

雑川 貴生川支部句会（滋賀県）

於 木人居　黄瀬美秋報

吉日の仲人の足袋黒うなり　俊子
乗る人もなくてブランコ春を待ち　四苦峯
ぶらんこの瞬はけんかの種となり　研玉
我儘を通し二十で死を選び　美秋
我儘な娘とは思えぬ見合の日　碧水
式辞もう次の選挙の準備なり　迷羊
居眠りをさませば式辞まだ続き　凡骨
元日の式辞は白い息になり　春巣
よいとこへ案内します運転手　同
古ハイヤ運転までもあやしまれ　柳月
オートレース見物人が気を使い　木人
運転手どうも気になる客を乗せ　夢生

雑川 赤坂支部句会（岡山県）

三月五日　於 戸川医院　政田大介報

子の怪我を会う人ごとに説明し　佳目夫
バスガール歌うが様に説明し　一流

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　大萬

★大万川柳（第五十二回）を募る
兼題「前　借」　路郎先生選
締切・六月十五日（旬歌五旬以内）
発表・六月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

説明もしどろもどろの恐妻家　兼比羅
改良カマド説明よりも薪を喰い　達江
小細工の腹の底まで見透され　宇柳
説明をするステッキが輪を描き　玉露
店番もヂレで一人減し二人減し　苔石
店番の食事がとんだうれしい日　一柳子
店番も出来ず離れで胸を病み　春仙
店番の娘をからかうも花帰り　美由
生酔の客が店番手古ずらせ　沐雨
又箸を置いて店番立たされる　雨水
急いでる針のみみどが通りかね　米豊年
失敗をしたと頭の無い写真　三四詩
水道へ酔覚めの口持ってゆき　舟楽
気が向かんからと彫師の今日も酒　馬洗

川雑布哇支部　**ウイロー社句会**（ハワイ）

ラッシュアワー鼻突き合すバスの中　虹橋
牛の鼻思い出すような耳輪かけ　伯楽
獅子鼻も親は豪傑鼻に見え　拝山
増給かいフフンと鼻であしらわれ　快夢起
鼻声で女給お客を打診する　陽炎
何々と学位を傘に鼻高し　周防
優勝の馬を鼻面撫でてほめ　迷朗
隆鼻術鼻は立派になったけど　東田楼
低い鼻しみ〳〵父に似たを悔い　草一郎
持参金矢張り鼻もついて居た　魔花麗
気乗りせぬ話返事を鼻でする　柳葉
鼻声の度に旦那は買ってやり　旋風
決勝の一鞭鼻の差できまり　影法師
弁解の出鼻をヒスの眼が押え　馬喜々

みをつくし川柳会（大阪市）

三月八日　於　天王寺中学校　神谷凡九郎報

玄人が握れば海苔の味もさえ　圭水
見えすいた上手やっぱりうれしい気　のぼる
古新聞切りさいなまれた家庭欄　翠露

333川柳会（堺市）

火をかりてピースやぎと言っておく　広平
税務吏に煙草を出せば喫わんです　雪山
葉巻喫うそんな儲けはしておらず　貴山
漬物になじみ貧乏板につき　喬也
山海の珍味こうこでしめくくり　冗歩
漬物まで違った味の嫁ぎ先　満春
沢庵も汗をかいてる昼弁当　比呂坊
団体にわやにされてる二人連　俊平
こぼれたのが隣りの団体で呑んで居り　一楽
団体だっかと女中立ったまま　好郎
合の手にあくびが入る小唄会　春水
春うらら猫のあくびで気もほぐれ　蛙仲
手のひらに余る大きなアクビをし　夕霧
途中下車ポスター程に咲いていず　好郎
真直ぐに帰れと社長途中下車　雄声
思い出が瞼に浮ぶ途中下車　同
橋本の灯が招いてる途中下車　狂二
途中下車鰻のうまい安いとこ　貴山
途中下車都合の悪い人に逢い　子母
途中下車一寸ついでに神詣り　久吉
途中下車葉書の地図を出してみる　冗歩
熱海の灯降りろ降りろとかがやけり　晴美
もう一軒無心言う気の途中下車　好郎
借金の気づまり途中下車で逃げ　素男
途中下車見付けられたを露知らず　雪山

明和病院川柳青蛙会（西宮市）

山本九里三報

ハイヒールぴょん〳〵春の泥へ跳び　酔乎
描き眉毛落し玄人の昼の風呂　善坊
お父さん又言い訳け折を下げ　里奴
玄人に生きねばならぬ厚化粧　和代
菜ッ葉服着て春泥をためらわず　同
アベックの車がかけた春の泥　薫
参観日行かず玄人子を想う　貴美
大阪弁儲ける腕と遊ぶ腕　牧人
お父さんは御機嫌アクビかみころし　京
玄人のタンカ涙を秘めている　成詩
審判がアウトだっせと草野球　同
人生を勝負に生きた黒袴　柳太
共稼ぎバ、もへそくり持って居り　北斗
玄人のたった一歩が命取り　しげる
撥ダコが出来て綺麗な嘘も言え　美路

南海電鉄川柳会（大阪市）

友淵貴山報

守札割れて助かる有難さ　貴山
守札遺族淋しく握って見　圭水
子の箸が又も豆腐の型くずし　同
豆腐屋へ今日も真赤なお手々の子　春翠
女医のしわはっきり博士号遠く　貴山
博士にもてんと判らぬ子の気持　雄声
苦るしさを博士学問的に割り　貴山
アベックがわざと仕組んだ乗りおくれ　一好
乗りおくれ腰を据えての飲み直し　雄声
子の無理がたたった今日の乗りおくれ　圭水
乗りおくれ膝の力が抜けたよう　のぼる
乗りおくれ汽車正確とあきらめる　貴山
恋人がついに来なんだ乗りおくれ　春翠
新の靴気にして電車乗りおくれ　雄声
乗りおくれと云うことにして泊ろうか　路郎
公約を実行せよと野次が飛び　昭月
差向い十代同志のおこのみ屋　南天郎
不夜城に紙のさくらが咲き二月　十悟
大阪城見える所が知事の部屋　摩天郎
構えだけお城に似てる斜陽族　圭水
ラッシュアワー避けて帰った薬瓶　雄声
ラッシュアワー夕刊折ったままもまれ　貴山
ラッシュアワーその盲点をついて乗り　のぼる

川雑　**阪東ベルト川柳会**（神戸市）

於阪東調帯ゴム株式会社食堂　飯尾寄与史報

ローマ字でサインしてかと帽子出し　歩ッ歩
お父さんのカンカン帽を案山子にやった　照夫
突風ははっと思うまに帽子とり　三平
海水帽親子おんなじ色で浮き　寄与史
来賓席帽子の欲しい陽があたり　同
相撲とる子供帽子を母の手に　美喜坊
ひさしだけさわっただけの御挨拶　比加留
見合するネクタイ母の手を借りる　寄与史
ネクタイを初めてしめたはずかしさ　水沢
足元に落ちてるサイフちょっとけり　村雨
マネキンは足の裏まで見せてくれ　比加留
足いえた子石けりの傍に立ち　歩ッ歩

日置村青年團句会（兵庫県）

出口白猫児報

積み上げた新米に猫が座を作り　風来坊
カレンダー福ももらえず取替る　芽花
ひやかしのつもりで言った値に下り　ひろむ
男の子学校だから掃除をし　秋峯
独身寮はいて拭いても一間きり　冴子
大掃除へそくりが気になって来る　ひろし
大時計位置にもどして掃除すみ　低水
メモ帳を破って住所書いて呉れ　白猫児
返された傘は調べてからたたみ　芽花
御無沙汰の友より賀状来てうれし　一柳

柳界展望

▼本社六月句会は、六月十一日(土)午後六時半から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催する。来会歓迎▼南区医師会杏林川柳句会は五月十七日午後七時半から故長谷川悟路博士宅で、追悼川柳会を開いて故人を偲ばれた▼既報川雑倉敷支部川柳大会は五月廿二日午後十時から倉敷市本町観竜寺で開催▼川雑堺支部五月句会は新緑、作句シーズン本社より路郎師、葭乃女史を迎えて五月二十日午後六時から摩天郎居に於て若葉川柳句会を開催。なお前回の第四回堺市長杯は辻圭水氏獲得。▼南海電鉄川柳句会は五月二十三日午後六時から粉浜親和寮で開催▼大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会では恒例によって五月廿九日(日)に京都の鹿ケ谷方面へ書翼吟行を催される以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部主催で吟行句会を六月五日午前九時阪急梅田駅正面へ集合嵐山線松王神社前下車、京都嵯峨寺(西芳寺)へ。兼題「名物」「人出」「仏壇」「雑吟」の四題▼川雑阿倍野支部は五月八日国鉄天王寺駅集合の上、竜田、法隆寺の古跡を巡る家族連れ、春季吟行川柳会を挙行、楽しき一日の清遊を催された▼3・3・3川柳会(堺市)は、三日午後五時半から鳥野工業株式会社会議室で五月句会開催。▼川雑阿倍野支部(大阪市)五月句会は十九日午後五時半から阿倍野区松崎町二西光寺で開催。▼川雑赤坂支部(岡山県)では五月七日夜小原公民館で小原上水道完成祝賀川柳会を開催▼国立公園鷲羽山川柳大会(岡山県)が五月八日。山頂陶光亭で開催され県下柳人六十名が参加盛会▼三菱電機紅菱会青蛙川柳会(尼崎市)は五月九日午後五時から同社正門前健保会館で三周年記念大会開催▼川雑大原支部(岡山県)諷柳会の四月句会を十一日午後六時から秋芳居で開催。なお、五月十一日には大野公民館で大野小学校落成祝賀句会が開催された。▼川雑備前支部(岡山県)四月例会を九日午後六時から娯句楽居で開催なお五月例会は七日に吉永駅長官舎で開催▼広島川柳会第二例会は二十五日午後六時から広島貿易館で開催▼川雑弓削支部句会(岡山県)は五月七日宮本薬局で開催▼岡山電報局四月例会は十六日午後六時同局で開催▼川雑岡山市内グループ川柳会は四月二十二日夜風来子居で開催。▼村田周魚氏は多年のウンチクを傾けて執筆された「川柳雑話」を五月十五日に刊行された柳人の一読をお薦めする定価二五〇円東京都豊島区高田本町二丁目一四五九川柳きやり吟社発行▼大島瀟明氏熊本県は四月七日かねて建築中の住宅竣功、熊本市出水町国府字源七戸井二〇八八へ居を定められ「大の字で寝る気安さの家が出来」の句信を寄せられた。▼米沢暁明氏(大洲市)は同市三善中学に転任、十七年振りに自宅常磐町へ住居「宿命か奇縁かまたも返り咲く」の句信を寄せられた▼川雑淀川支部の三原朝風氏は潮風と改号▼久保和友氏(滋賀県)は五月二日奥日光に旅行され、同地湯元から「伝説も戦場ケ原の神と神」の句信を寄せられた。▼故上田芝有氏の二周忌が五月十二日に天王寺本坊で行われた。(摩)

柳人交歓暑中広告を募る

八月号へ貴方の暑中広告を

★一ト口金二百円。幾口でも申込んで下さい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は六月末日限

☆広告料は前金のこと(郵券代用でもよろし)

川柳雑誌社

編輯室にて

★毎号原稿が輻輳する、編輯をするものにとってこれぐらい力強いことはない★私はこの編輯を片づけると又旅へ出る。今度は倉敷へ出かけることになった。それで今、大車輪で働いている★近来、私の出る会も多くなったので随分忙しい。★七月は恒例の「川雑川柳まつり」がある。本社では豆秋君が川柳まつりの唄を作詞してそれを潮花君が踊の師匠に振付してもらい、自分が指導して余興におどらせると云っている。段々エライことになりそうだ★潮花君は近ごろ女流作家のインタービューで活躍しているが、踊にかけても豪の者で、口八丁、手八丁、足八丁の男である。★うちのおばあさんの句集「福寿草」の前人気が大変いいのでよろこんでいる。年はとっても女はトクである。シッカリ応援してやっていただきたい★又々暑中広告をお願いする時季に入った。これ又よろしく。(路)

小児科
内科

平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

募集

課題吟募集

犬(ビルディング)(廿句)大鶴 喜由選
(廿句)八木魔天郎選
(六月二十日締切)

支払(廿句)小川 恒明選
噂(廿句)松江 梅里選
(七月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽(雑詠廿句)麻生路郎選
川柳塔(雑詠)北川春巣選
文章(評論・研究・感想其他)麻生路郎選
(毎月廿日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。

▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第十卷 第六号

定価 四〇円

(禁轉載)

半ヶ年 二六四円(送料四円)
一ヶ年 五二八円

昭和三十年 五月廿五日印刷
昭和三十年 六月一日発行

大阪市住吉區區内万代西五丁目二五番地
編輯兼發行人 麻生幸二郎

大阪市住吉區區内万代西五丁目二五番地
印刷人

発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 (代) 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

行發日一月大年昭和二十一年　本誌認可日五廿月五年昭和二十一年　（行發日一回一月毎）可認物價郵便第三種日一月七年二廿昭和

THE SENRYU ZASSHI

NO・337

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧を忘れよう！
サーピナ錠
1日1～2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠！成分含量も多くてお得です
山之内

O.S.K のレディメード
株式會社 大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目
電話東㊸一七四五番

大阪名菓
なにかにかわるもの
浪花の最中
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話㊸三四〇九

円四料送　圓拾四價定　誌雜柳川　號七三三第